
気付いたら、そこは学園都市で

すねえく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気付いたら、そこは学園都市で

【Nコード】

N2192Y

【作者名】

すねえく

【あらすじ】

転生者の夏野太陽は、前世でいつの間にか死んでいて、雛見沢でのゲームを終えた後、この学園都市に転生された

夏野は前世の記憶を持っておらず、目を覚ますと同時に学園都市のことを知るが・・・

序章 7月19日

どうも、夏野です

転生させられた記憶はあるんだけど、どうも前世の記憶がないのよね
どうやらこの学園都市の高校1年生で、ある高校に通ってて、隣に
はツンツン頭の不幸少年上条当麻がいて・・・

この学園都市は頭の開発を平然と時間割り《カリキュラム》に組み
込んでいる場所、その学園都市に住んでいる230万人もの学生全
てが強度な超能力を持っているわけではなく、全体の6割弱が全く
持って仕えない無能力ばかりだ

レベルを判定するのは身体検査で、システムスキャンそれをはかる機械どもに無能力
の烙印を押されたのが、隣人の上条当麻である

その上条当麻は、無能力であるにもかかわらず、様々な不幸が降り
かかる

そして、その上条の隣人、夏野太陽は転生者であり、前世の記憶を
持つておらず・・・

デコンボジションコンバイン
低能力者の分解結合

空気中の電子や、酸素などの粒子などを分解し、ある物質と結合し
て新たなものを作る能力

ただ低能力者であるため、砂を分解して軽くし、風で巻きあがった
ところで再び結合して砂埃をあげるといいう使いかたしかできない

それは身近なやり方であって、他にも使い道はある

砂埃をあげるのが身近なのはなぜかって？

今この状況を見れば分かるだろう

7月19日

俺、いや俺達は絶賛逃亡中なのであります

全てはここから始まった、気がしくもない

「ええい！くそっ！くそっあーもうちくしょう不幸すぎます！！」
俺は隣を走っているツンツン頭のクラスメイト上条当麻の変態じみた叫びを聞いていた

俺達の後ろには不良が8人追ってきている
何でこんなことになってるかって？そうさ、全部7月19日が悪いんだ

明日から夏休みなのでテンションが上がっていた俺達二人は、豪華に無駄食いでもするかー！ということでファミレスに入り、酔った不良に絡まれている中学生くらいの女の子を見て、上条が助けてやっかなー、とか常軌を逸した思考回路が働いてしまったようだ

俺も反対しなかったよ？だって見捨てられねえじゃん
でもさ、トイレから不良がぞろぞろ出てくるんだよ

集団でトイレに行くのは女の子の特権だろ！？なんで野郎がぞろぞろとトイレ行っただよ！？

というわけで俺達は絶賛逃亡中なのであった

「てかなんで食ってもないのに食い逃げ扱いされんだよ！？不幸だ！！」

この不幸少年上条当麻は辺り構わず不幸を引き寄せ、不良に追われているこの状況から、まだ食ってもないのに食い逃げ扱いされるは散々なのだ

かくいう夏野も

「俺だって巻きこまれてんだし一緒じゃねえか！！」

今更確認した事実に向き合って頭を抱える

そんなことをしている間に不良達は上条と夏野を捕らえるために追ってきている

きっと捕まった後に目を覚ますのは、傷だらけになった自分の体があつて、病院のベッドに寝ているだろう

「ちくしょう！んなことになってたまるか！」

俺は能力を使用し、砂埃を撒き散らした
デコンボリューションコンバイン
分解結合

空気中の電子や、酸素などの粒子を分解し、ある物質と結合して新たなものを作る能力

ただ低能力者である夏野は、砂を分解し軽くして、巻きあがったところを結合して砂埃をあげる使い道しかない、いや、その使い方が定着していた

砂埃で敵の目をくらませた上条と夏野は表通りに出る

そこはどこもかしこもカップルだらけで、一人身である夏野は悲しい気分になった

「見せつけかよ！？俺達はこんなことしてるってのに、こんな事以外に青春使いたいわボケ！！」

「うっ、不幸だー！！」

不良達を完全に撒くためにカップル達の間を切り抜けて、全力疾走する上条と夏野であった

そこから更に2キロほど走ると、大きな川にでた

その大きな川には鉄橋がかかっており長さはおよそ150メートルだろうか

夜の鉄橋を突き抜ける上条と夏野はふと足を止め、後ろを振り返った

「や、やっとな撒いたか・・・」

「何でお前といるとこんなことになるんだ？暇じゃないからいいんだけど、スリル感ありすぎだろ」

素直な感想を夏野は述べて、空を見上げて少し落ち着こうといったところで

「ったく、何やってんのよアンタ達。不良を守って善人気取りか、熱血教師ですかあ？」

上条の体が凍りついた感じがした

上条と夏野が走ってきた50mほど先に、女の子が1人立っている灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーターという

格好の、何の変哲もない中学生くらいの女の子だ

あれ？確かあの子ってファミレスで絡まれてた子じゃ・・・
それに不良を守ってってどういうことだ？

上条はぶっ倒れるかのように後ろに体重をかけながら

「・・・っことはあれだろ？後ろの連中が追ってこなくなったてのも」

「うん、めんどいから私が焼いた」

なんつー中学生だ

俺の目の前にいる中学生は絶賛ビリビリ中だ

肩まである茶色い髪が揺れるたびに青白い火花がビリビリーってなってるのだ

俺はあの子のこと知らないけど、上条は知ってるみたいだな

「知り合い？」

「知り合いつちや知り合いだけど・・・」

上条ははあ、とため息をついて

「つか俺が何したってんだよ」

「私は自分より強い人間がいるのが許せないの、それだけあれば理由は充分」

いや、理由かどうかも怪しい根拠だけど、どうなのかな？

レベルが低いゲームでももうちょっと詳しい説明があると思うんだが

「けどアンタもバカにしてるわよね、私は超能力者なのよ？何の力もない無能力者相手に気張ると思ってるの？弱者の料理法くらい覚えてるわよ」

・・・聞き間違いだと思うんだけど、多分違うよなあ

確かに今あの子は超能力者って言った、絶対言った

合点がいったぞ・・・上条はあの子を助けようとしたんじゃないって、不良を助けようとしたのか

結果不良達は黒こげにされたみたいだけど、仕方ない

この街で真に強いのは、何も暴力最強！とかじゃなくて、彼女のような特待生クラスの超能力者だ

ちなみにこの学園都市には超能力者は7人しかいない

その超能力者は確か32万8千571分の一の才能の持ち主なんだっけ？

まあ凄いってことだ

そんな超能力者サマが無能力者+不幸体質と低能力者の前に立っていることは凄い事なのか？

多分凄い事だろう

「お前が32万8千571分の一の才能の持ち主なのはよく分かってるけどさ、長生きしたかったら人を見下すようないい方やめた方がいいぞ、ホント」

俺の知識は間違ってたみたいだ

「うっさい、血管に直接クスリ打って耳の穴から脳直で電極ぶっ刺して、そんな変人じみた事してスプーン一つも曲げられないんじゃない、そいつは才能不足って呼ぶしかないじゃない」

この学園都市はある意味ひどい場所だよな

自分にはどんな能力があるのか、とかそんな夢みたいなことを思ってきてみれば、無能力の烙印を押されて絶望するってのがある

実際230万人もの学生の中で6割弱が無能力者なのだ

そんな無能力者がいる中でも低能力者の俺はまだまじだろう

「スプーン曲げるならペンチ使えばいいし、火が欲しければ百円ライター買えばいい、テレパシーなんてなくてもケータイあるだろ、んなに珍しいもんか、超能力なんて」

屁理屈だ、テレパシー以外は即効で行えるから能力の方が便利だろうな

でも無能力者と低能力者でそんなに差がないのは事実だ

だから強能力者くらいになったらエリートってことになるんだろう
「大体、どいつもこいつもおかしいんだよ、超能力なんて副産物で悦に入りやがって、俺達の目的ってな、その先にあるもんじゃなかったっけか？」

そもそもなんで上条さんは超能力者のあの子と知り合っただんだ？

気になるから、後で聞こう

「はあ？・・・ああアレね。何だったかしら、確か人間に神様の計算はできない、ならばまずは人間を超えた体を手にしなければ神様の答えに辿り着くことはできない、だっけ？」

鼻で笑ったぞこいつ

俺は腹を抱えて大爆笑したいくらいなんだが、おさえている

「はっ、笑わせるわね、一体何が神様の頭脳なんだか、ねえ知ってる？解析された私のDNAマップを元に軍用の妹達^{シスターズ}が開発されてるって話、どうやら目的よりも美味しい副産物だったみたいじゃない？」

そこで口がピタリと止まった

・・・変な空気だ、嫌だなーこれ

「・・・ていうか全く、強者の台詞よね」

「は？」

「強者、強者、強者。生まれ持った才能だけで力を手に入れ、そこに辿り着くための辛さを全く分かってない、マンガの主人公みたいに不敵で残酷な台詞よ、アンタの言葉」

川のざざざーって音が嫌というくらいに耳に入る

いやー黙って聞いてみたらなかなかいいものじゃないか

そんな雰囲気じゃないけど

「おいおいおいおい！年に一度の身体検査見てみるよ？俺の能力^{レベル}はゼロでお前は最高位《レベル5》だぜ？その辺歩いてる奴に聞いてみるよ！どっちが強いかなんて一発で分かるって！！」

単純な足し算よりも簡単じゃないか

俺は、上条にかける

「ゼロ、ねえ」

スカートのポケットに手をつ込んだかと思うと、メダルゲームのコインを掴んで再び出てきた

あれ何？

「ねえ、超電磁砲^{レールガン}って言葉知ってる？」

「あん？」

「超協力的な電磁石を使って金属の砲弾を打ち出す兵器だな、理屈はリニアモーターカーと一緒にだ」

そこで俺が口を開いた

人間って、知ってることを聞かれるとついつい喋っちゃうよね

仕方ない

「よく知ってるじゃない」

それだけ言つとピツ、と親指でメダルゲームのコインを真上へ弾き飛ばし、回転するコインは再び親指にのって

「こついつのを言つらしいのよね」

「嫌な予感ッ!？」

俺が叫んだと同時に、俺達の間をオレンジ色の光の槍が突き抜けた槍つてよりレーザーに近いな、あの子の親指からは光の残像の尾がのびていた

その後、雷のように一瞬遅れて轟音が鳴り響いた

その音を聞いて俺の体のバランスは一瞬崩れかけた

よろめく俺は、後ろを振り向く

鉄橋の路面にオレンジ色のレーザーが激突した瞬間、アスファルトが吹っ飛んだ

「こんなコインでも、音速の三倍で飛ばせばそこそこ威力がでるのよね、もつとも空気摩擦で50mも飛んだら溶けちゃうんだけど」
鉄橋のあちこちで金属ボルトがはじけ飛ぶ音が聞こえる

俺の額に、走って流れた汗とは別の汗が流れる

超能力者ってこんな感じなの？

「て、メエ、まさか連中追い払うのにそいつ使ったんじゃないだろうな・・・!!」

「さ、さすがにそれはないだろ、誰だって殺人犯にはなりたくないだろうし・・・いや、俺死んだ？」

すぐ横をあんなレーザーが通り過ぎていったので、まだ頭が混乱している

「あんな無能力者、追いついてやこいつで充分でしょ、っと！」

瞬間、雷撃の槍が飛んできた

避ける？できるはずねえだろ！！

光の速さは確認してから避けれる代物じゃねえ、予測してなきゃ避けねえ

当然、俺は予測してなかったさ

人相手にそんなもんぶつけてくるってどうよ！？ありえないね！！

「上条！！」

俺は隣にいたクラスメイトの名前を叫ぶと、腕で顔をふさいだ

上条の右手に雷撃の槍が当たり、四方八方に電撃が飛んでいった

まあな、これをくらって無事な無能力者がいるわけないだろう

普通の無能力者ならな

「で、何でアンタは傷ひとつないのかしら？」

上条の体に火傷の跡はなく、右手も吹っ飛んでいない

確かにあの雷撃の槍はもの凄い威力だった

周囲に飛び散った電流は鉄橋の鉄骨を焼いている

にもかかわらず、上条は無事だ

「まったく何なのよそんな能力、学園都市の書庫バンクにも載ってないんだけど、私が32万8千571分の1の天才なら、アンタは230万分の1の天災じゃない」

上条は右手に幻想殺し《イマジンプレイカー》という能力を宿している

この右手で触れれば、例えば大きな火の玉であろうとも、光の速度の雷撃の槍であろうとも、打ち消せる

俺が偉そうに語れた義理じゃないんだがな

「そんな例外相手にケンカ売るんじゃ、こっちもレベルを吊り上げるしかないわよね？」

「・・・それでもいっつも負けてるくせに」

再び音速を超える雷撃の槍が飛んでくるが、上条の右手に触れると同時に、四方八方に飛び散っていく

上条の幻想殺し《イマジンブレイカー》はそれが異能の力であるならば、打ち消せてしまう

異能の力を打ち消す異能、だが身体検査では右手が異能の力を打ち消してしまったため、無能力者と判定されるのである

でも、この幻想殺し《イマジンブレイカー》にも問題点がある

まず異能の力以外は打ち消せないのも、コンクリの破片は突き刺さるし、打ち消せるのは右手首から上までだ

他の場所に異能の力が直撃すれば、問題なくダメージを受ける

なので今上条は激しくあせっているであろう

「なんていうか、不幸っつーか・・・ついてねーよな」

上条は、右手を前に突き出したまま、呟く

7月19日という日を、一言で締めくくるように

「お前、本当についてねーよ」

「ちょ、俺がいるのに戦闘開始されては俺の身が持たないっていうかなんていうか、ちくしょー！！不幸だアあああああああ！！！！！！！！！！」

俺は友人の口癖を叫びながら、寮に向かって走り出していた

全てはここから始まった、気がしなくもない（後書き）

原作ベースの小説です

ここまで書くのに禁書の1巻を読み直しして、書きました

おかげで作業時間はいつもの倍くらいかかりました

その分書いた後の喜びも増えるんですが、ねえ

さて夏野君はここから先どうやって成長するのか、見守ってやってください

魔術師？何だそれ、嫌な予感しかない

まあ、なんつーかあれだよ

不幸だな

俺は何事もなかったように学生寮の一室で眠っていたわけなんだが何事もなかったわけじゃない

昨日戦闘に巻き込まれないように全力疾走（二回目）をして学生寮に逃げ帰ったわけだが

その途中で後ろから電撃の槍が飛んできてすぐ横を通ると、目の前の地面に当たって破片が飛び散ってきて、なんとか避けて恐怖におびえつつ帰ったわけなんだけど

学生寮につくと同時に、雷がドーンと落ちてきて目の前が真っ白になって、部屋に入ったら家電製品が全部パーになって、冷蔵庫になんにもなくてよかったと心底思いたかったが、生憎中身はあるわけで今俺は朝飯にありつけない状態になっていて・・・つまり、そういうことだ

上条の不幸体質が俺にも伝染^{うつ}ったか？

その上条は多分今頃補習に行ってるんだろうけど

俺はそこらへん全然問題ないし大丈夫だと思う、思うだけ

・・・気晴らしに散歩に行くか

と思ったら電話が鳴って『夏野ちゃんバカだから補習でーす』という担任からのラブコール

まじかよ、俺補習受けなきゃならんほどバカだった？

ちくしょう、さっきの全然問題ないは取り消したバカ野郎！！

俺はため息をはきつつ、準備をしてから学校に向かう

それにしても俺の能力は強いはずなのに低能力なんだよな

誰かに特訓つけて貰おうにも相手がいないし、当然上条では相手が務まらない

・・・昨日のビリビリ中学生はどうだろうか

あんなことがあつて非常に頼み辛いがなんとかいけるんじゃないか？
そんなことを考えていたら学校に辿り着いていた

夏休みに補習つてこんなに悲しいことはねえよ

教室のドアに手をかけ、横にスライドして教室に入る

俺は自分の席に座ると前を見た

「はいそれじゃ先生プリント作ってきたのでまずは配るですー。
それを見ながら今日は補習の授業を進めますよー？」

このクラスになってから1学期過ごしてきたけど、まだありえない
と思う

我が1年7組の担任月詠小萌は教卓の前に立つと首しか見えなくな
るといふとんでもない教師だった

身長は135cmで、そのまま赤いランドセルを背負ってそんな1
2歳の少女にしか見えない

学園都市はそんな研究までしてたのかと言いたくなるところだが、
これで自然である

「おしゃべりは止めないですけど先生の話を聞いてもらわないと困
るですー。先生気合を入れて小テストも作ってきたので点が悪かつ
たら罰ゲームはすけすけ見る見るですー」

「それって先生あれでしょ！？目隠ししてポーカーしろってやつあ
れは透視能力専攻の時間割りだし手元のカードも見えないのに10
回連続で勝てるまで帰っちゃだめとかそのまま朝まで生居残りだと
わたくし上条は思うのでせうが！」

「はいーけれど上条ちゃんかいほうは記録術の単位足りないのではどの道すけ
すけ見る見るですよー？」

同情するぜ上条、今日俺に不幸が降りかかってこないことをお祈り
しとくよ

「・・・むう、あれやね、小萌ちゃんはカミヤんが可愛くて仕方な
いんやね」

上条の隣に座っている青髪ピアス学級委員が訳の分からないことを
言っている

俺は多少なりとも理解できたがな

「・・・おまいはあの楽しそうに黒板に背伸びしている先生の背中に悪意は感じられんのか」

「・・・なに？ええやん可愛い先生にテストの赤点なじられんのも、あんなお子様に言葉で責められるなんてカミヤん経験値高いでー？」
「救えねえ、ロリコンの上にMかよ」

「ロリコンの上にMか temeエー！！まったく救えねえよー！！」

「あつはーッ！！ロリが好きなんとちゃうでー！！ロリも好きなんやでー！！」

くっそコイツ、早くどうにかしねえと

手遅れだが

「はいそこっ！それ以上しゃべりやがったらコロンブスの卵ですよー？」

コロンブスの卵ってのは逆さにした生卵を机の上に立ててみるって

ことだ

サイコキネシス

念動力専攻の人間だって脳の血管ちぎれそうになるまでやって、卵をこけないようにする、なぜそこまでかというと、念動力が強すぎて卵が割れるとかいったそういうアレだ、例によって成功しなければ朝まで生居残りとなる

上条と青髪ピアスは同時に教卓にいる月詠小萌を見た

「おーけーですか？」

2人からすれば、この笑顔はとてつもなく恐ろしいものだろう

俺しゃべんなくてよかったな、上条がかわりに突っ込んでくれてるからよかったんだけど

すけすけ見る見る、ましてやコロンブスの卵なんて死んでもごめんだね！

「・・・なあカミヤん？」

「あんだよ」

「小萌先生に説教くらうとハアハアせえへん？」

「 temeエだけだ馬鹿！！もう黙れ、黙れ馬鹿！！サイコキネシス念動力にも目覚め

てないのに生卵と戯れてたら夏休み終わっちまうわ！！分かれこのエセ関西弁！！」

ちよ、お前等、コロンブスの卵が・・・

「エセ？・・・えええええエセいうな！！僕はほんまに大阪人やねんな！」

「黙れ米どころ出身、イライラしてんだから無駄にツツコミいれさせんなよ」

「こ、こここ米どころ違いますよ！あ、あーたこ焼き美味しいなあ」

「無理矢理な関西属性やめろ！テメエは役作りのためにたこ焼きおらずに飯食えんのか！」

「いや何言つてん、いくら大阪人でもたこ焼きオンリーに食卓を彩るわけないやろ」

沈黙

「・・・」

「ないやろ？ないと思う・・・いや待ち、けど・・・でも、ない、けど・・・あれ？どっち？」

「メツキはがれてんぞ関西もどき」

上条ははあ、とため息をついた

まあこんなバカの相手してりゃ疲れるわな

てかこんなエアコンもない蒸し風呂状態の教室で補習してるのもプラスされるから余計だな

俺はエセ関西人の相手してなくてもすでにグロッキー状態だもんもつとレベルが高かったらこんな暑さどうとでもなるんだろうけどなー

分解できるもんは限られてるし役に立たないわけじゃないけど、戦闘には使えないよな

そもそも戦闘なんてやるかどうかも怪しいけど

この世界に補習なんてもんがあるから悪い、ちくしょうこうなりや意地でもレベル高くなってやる

つか暇だ、なんで俺は不良達との追いかけっこや夏休みの補習な

んぞに青春削られなきやならんのだ

俺だつて年頃の男の子だし、もっと青春してえよ、昨日のカップルみたいに

見せ付けやがって気にいらねえ、ちくしょう祝つてやる！

こんなことを考えてて虚しくなったので、俺も思わずため息をついた
上条の方から舌打ちが聞こえた

おーおー話も聞かずに窓の外のテニス部のひらひらに夢中ですか、
いいんじゃないかな、そういう青春も

俺は上条の不幸体質を痛いほど知ってるので小萌先生には言わない
が、果たして青髪ピアスは・・・

「センセー上条君が窓の外の女子テニス部のひらひらに夢中になつてまーす」

予想通りだな、ほれみろ、小萌先生が沈黙してるじゃないか

上条は窓の外から教室に顔を向けた

授業に集中してない上条にショックを受けてるみたいだ、まるでサ
ンタさんの正体を知ってしまった12歳の冬みたいな顔をしている
俺はサンタの正体なんてとうの昔に知ってたけどな

そして俺を除く鋭い痛いほどの視線が上条にそそがれた
気の毒なり、上条

ねえ、なんで俺も付き合わされたの？

夏休みの補習と言っておきながらしつかりと完全下校時刻まで拘束
された

風力発電の三枚プロペラが夕焼けにきらきら光ってやがる

そんな風力発電のプロペラを見ながら俺の隣にいる上条は

「不幸だ・・・」

と呟いた

一日に数10回は言っているこの台詞は俺の口癖になりかけの代物だ
俺は上条の隣にいるせいかな、様々な不幸が降りかかり、巻き添えを
くらっている

俺と上条が同時にため息をつく

「あついたいた、この野郎！ちよつと待ちなさ・・・アンタ達よ！止まりなさいってば！」

あー俺暑さのせいで幻聴まで聞こえてきたのか

昨日のビリビリ中学生だと気付いたのは、後ろを振り向いて姿を確認してからだった

肩まである茶色い髪に、灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーター、間違いなくビリビリ中学生だ

「あー、またかビリビリ中学生」

「ビリビリいうな！私には御坂美琴ってちゃんとした名前があんのよ！アンタ初めて会った時からビリビリいつてるでしょ、いい加減覚えなさいよ！」

俺はふと朝考えていたことを思い出した

そーいや特訓つけてもらおうって考えてたなー

「そーいやビリビリ、頼みたいことがあるんだけど」

「アンタまでビリビリ言うなー！！」

そーいうとビリビリ・・・御坂美琴さんはビリビリーと前髪から電撃を散らす

そのままタイルを勢いよく踏みつけた

瞬間、辺りを歩いてた人々の携帯電話がバキリ、といやな音を立てた
商店街の有線放送がプツンと切れ、そこらを走っていた警備ロボットのバキリ、と音を立てた

そこまできて、嫌な予感がした

警備ロボットの警告が始まる前に・・・

俺は御坂と上条を掴んで逃げ出した

直後、警備ロボットのビービーという警報が辺り一面に鳴り響いた

何で、俺も一緒に逃げてるんだろう？

あーそうだそうだ、頼みごとがあるからだ、これは仕方ない事なんだよ

でも上条まで巻き込んだのは悪かったかなー

さつきから御坂と上条がぎゃーぎゃー言ってるし、結構うるさいから止めに入ることにした

「はいはいケンカはやめなさい、ビリビ・・・御坂も勝てないからってそんなに言うんじゃないやありません」

「うつさい！口出しすんな！」

あらあら、小さい子供みたいね

御坂はビリビリーとしていたが、一瞬止まって

「・・・そういやさつき頼みたいことがあるって言うってたわよね？」

「覚えててくれたのか！なら話は早い！」

まさか人の言葉をちゃんと聞いているなんて！お兄さん感激！！

口に出したら間違いなく俺は黒コゲになってるな

「特訓つけてください」

「は？」

俺は深々と頭をさげてお願いした

「・・・理由は？」

デコンボジションコンバイン

「俺の能力は分解結合つって粒子とかそんなのを分解し、他のものと結合して新たな物質を作れるって能力だ、俺は低能力者だから全然役に立たないけど、高レベルになったらもつと社会のために役に立てると思ってさ」

俺は頭を上げてそう言った

実際、ほとんどの理由は上条と一緒にいる時の不幸トラブル回避のためなんだが

御坂はうーんと腕組みをして、何度か考える仕草をしてから

「・・・別に、いいけど」

ヤッター！！まさか承諾してくれるとは！！

俺完全にだめ元で言ったのに、人生分かんねえもんだな！

「えーっと、名前は？」

「夏野太陽、上条のクラスメイトで部屋は隣で不幸撒き散らされてるその人です」

「俺に文句言つてねえ？」

「文句は言つてねえよ、退屈しないからいいんだけど毎日不良に追い掛け回されたら体が持たん」

「アンタ等毎日なにしてんのよ・・・」

御坂にため息をついて呆れられた

そうなるわな、普通

ほぼ毎日不良に追い掛け回されてる奴なんてそうそういないだろうし

「じゃあ今からやつぞ！」

「今からだつたらなんだし、夜中でいい？」

「御坂が駄目なんじゃ・・・」

「見つからないようにすればいいの」

そういう問題か、てかこうも真剣に特訓してくれるとは

「携帯番号も交換しとくか、都合あわない日もあるだろうし」

「そうね」

俺は携帯を取り出して、番号を交換する

「ついでにアンタも」

「なんで俺が？」

「戦う時のためよ、いちいち探すのもめんどくさいし」

「うわぁ・・・」

そういういつもしつかりと番号を交換する上条

御坂は黙ってりゃ美少女だしな

俺達はそれだけの動作をして、別れた

御坂が上条に決闘を申し込む前に早々と逃げたので問題なかつた

俺と上条は寮についたんだが、こりゃどういうことだ？

清掃ロボットが上条の部屋の前にいたかと思うと、それに近寄つたら女の子がぶつ倒れてて、背中から血を流してる・・・

「何だよ、一体何なんだよこれは！？ふざけやがって、一体どこのどいつにやられてんだお前！！」

「うん？僕達、魔術師だけど？」

その声は、階段の方から聞こえた

声の主を見ると、白人で2メートル近い身長だったが、顔には少し幼さが残っている

服は神父さんが着ているような漆黒の修道服だった

ただし、こいつを神父さんと呼ぶ奴がどこにいるだろうか？

甘ったるい香水の匂いが感じられ、肩まである金髪は赤に染め上げられ、左右10本の指にはメリケンのように銀色の指輪がずらりと並んで、耳には毒々しいピアス、ポケットに携帯電話のストラップがのぞき、口の端では火のついた煙草が揺れて、極めつけには右目のまぶたの下にバーコードの形をした刺青タトゥーが刻み込んである

神父と呼ぶべきか、不良と呼ぶべきか

てか歳は14か15じゃないのか？煙草とかすってて大丈夫かよそれに、こいつ魔術師っていったか？

この学園都市の超能力も異常だけど、魔術ってなんだ？

「うん？うんうん、これはまた随分と派手にやっちゃって」

口の端の煙草を揺らしながら魔術師は辺りを見回す

「神裂が斬ったって聞いたけど、血のあとがついてないから安心安心とは思ってたんだけどねえ」

斬った、って何を？

この子をか？魔術師が？

目の前に立っている奴が斬ったんじゃないと聞いて分かるけど・・・
「けど、何で・・・」

と上条が言う

上条はこの子を知ってるんだろう、だからこの子は上条の部屋の前にいる

「うん？ここまで戻ってきた理由かな？さあね、忘れ物でもしたんじゃないのかな、そういえば昨日背中を撃った時点ではフードがあったけど、あれってどこで落としたんだろうね？」

それを言うてから上条と魔術師の口論が始まった

俺はただ、呆然とするしかなかった

魔術が存在したという現実、魔術師が今目の前にいるという現実
そして、今日の前に少女が倒れている現実
なんだ、これだけあれば充分じゃねえか

魔術師はステイル・マグヌスと名乗ってから、魔法名といわれるもの・・・言うなれば、殺し名

Fortis931、強者、という意味だ

魔術を使うときには真名を名乗っちゃいけないらしい
どうでもいいがな

「穏やかじゃねえよなあ・・・」

俺はそこで初めて口を開いた

ステイルは俺を見て、顔をしかめた

「そうかそうか、君も痛い目にあいたいみたいだね・・・」
そう呟くと

「炎よ――」

突如、魔術師がそういった瞬間炎剣が作り出された
そして

「巨人に苦痛の贈り物を」

炎剣を横殴りに叩きつけてきた

その炎剣は、上条の右手に打ち消されるべきだった

だが、上条の右手に触れることなく炎剣は消え去った

「なっ・・・!?!」

上条も驚いている

俺が高レベルの能力者なら、驚かなかっただろうな

俺は低能力者、炎を分解して消し去るなんて芸当、できるはずがねえ
でも、できちゃったもんは仕方ねえ

「面白い顔してんじゃねえか魔術師。テメエは可能性を考えるべき
だった・・・何も魔術は科学より勝ってるなんてことはねえ、テメ

エの力が通用しない可能性を考えるべきだったんだ」

俺は自分でも驚きつつ力を振るう

「行くぞ上条、このクソ野郎に一泡吹かせてやんだ」

「・・・ああ」

上条は笑って答えた

それに応えるように俺も笑う

「覚悟しろよクソ野郎、助けてくれつつたってもう遅い、そこに女の子が倒れてて、テメエが魔術師で、それだけありや充分だ、ぶっ倒すべき対象は、目の前にいるんだからよ」

特訓、する前に戦闘しちまったな

魔術師？何だそれ、嫌な予感しかない（後書き）

ありや、低能力者なのにすげえ力使ってる

どうもすねえくです

主人公は不思議ですね、何かいきなりレベル上がっちゃってる
有り得ないことなんです、主人公はやってのけちゃいました
ここらへんの説明は、身体検査の時に夏野が無意識にレベルを調整
してしまっただけという事で、いいんじゃないかな！

戦闘の時に本来のレベルの力を引き出せる、特殊なやつ

戦闘じゃなくて本気の時っていいじゃないかな

怒ってる時とか、真剣な時とか

不良から逃げてる時は真剣だけど、違う意味の真剣で逃げるための
手段を考えてるわけだから砂埃、低能力しか使えない

改善のしようはあるけど、それに気付かないもんだから改善できない
本当に、ややこしいですね

高電離気体砲ヘプラズマキャノン

炎は完全に消えたわけではなく、舞い上がる火の粉が再び集まっていき、俺と上条を包み込んだ

だが俺達は全く動じず、上条に目でサインを送る

右手が炎に触れた瞬間、炎はバースデーケーキにささったロウソクの火を全て吹き消すように消え去った

魔術師は、心底驚いたような顔をしていた

そりやそうだろう、目の前にとんでもないイレギュラーが存在するのだから

どっちも炎がきかないし、実際に両方に一度ずつ炎を消されているもはや魔術師ではなくただの人間だった

魔術師なんてもんは普通の人間にすぎないし、殴れば痛みを感じる、カッターで切れば傷がつく、血は赤いし、緑色でもない

そうだ、ただの人間だ

俺は魔術師というクソ野郎を殴り倒すべく、一歩ずつ近づいていく
それにあわせて上条も一歩ずつ

「チッ！！」

魔術師ステイルは右手を水平に振るう

生み出される炎剣を同じように勢いよく叩きつける

いや、叩きつけようとしたり、が正解かな

俺は即座に分解して、炎の効力を打ち消した

俺の能力は完全に消せるわけじゃないけど、効力をなくすことはできる

その間にも、一歩一歩、確実に近づいていく

再び炎が巻きあがるが、それを上条が右手で触れ、完全に打ち消す
ステイルの頬を汗がつつたうのを確認できた

そりや、あせるよな、自分が積み上げてきたモンが目の前にいる
この誰だか分かんねえ奴等にぶち壊されんだ

上条の原理、つーかどうやって打ち消してるかは分かるだろう

右手に当たりやあ打ち消されるんだ、それだけで右手に当たればとりあえず炎は消されるって認識ができる

でも、俺はどうだ？

実際触れずに炎を消す、分解してるわけで、科学側じゃなくて魔術側の奴等にはどう考えたって有り得ない話だ

つまり、上条はどうか対処できて、俺がいるってことだ

近づいていくと同時に、ステイルの体が震え、それを誤魔化すように更に炎剣を作り出し叩きつけた

今度は上条が触れただけで完全に無効化される

上条が炎剣を右手で叩いた瞬間炎剣が粉々に砕け散り、虚空へ溶けるように消え去った

俺と上条は、もうステイルが目の前のところまで歩いてきている
後一步、後一步で殴りかけられる距離まで

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

ステイルの体から汗が噴出している

それ以上に、今やっている詠唱が気になった

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。

それは穏やかな幸福を満たすと同時に、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。その名は炎、その役は剣。顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せッ！！」

ステイルの修道服の胸元が大きく膨らみ、内側からの力でボタンが弾けとんだ

炎が酸素を吸い込む音と同時に、服の内側から巨大な炎の塊が飛び出した

「・・・なんじゃこりゃ」

ただの炎の塊、とはいい難かった

重油のように黒くてどろどろしたものが芯になっていて、それが永遠と燃え続けている

それは人の形をしていた

学園都市なら高レベル相当だろうか

だが、それは上条の右手に触れると、水風船を針で刺したように飛沫となり、辺り一面に飛び散った

にもかかわらず、ステイルは笑っていた

何だ？おかしくなったのか？切り札を消されて、とうとうおかしくなったのか

だが、違った

おかしくなったわけではない、さっきのが必殺と呼ぶに相應しいものだったからだ

ビュルン、という粘液が四方八方から響渡った

その瞬間俺と上条は咄嗟に後ろに下がった

四方八方から戻ってきた黒い飛沫が空中で寄り集まり、再び人の形を作り上げていた

後ろに下がっていなかったら、今頃俺はあの炎に包まれ焼かれていただろう

それを考えると、ゾクリとする

上条の右手は、異能の力なら何でも打ち消せるはずだ

だったら今目の前にいる炎の巨人はどうやって説明する？

確かに一度打ち消したはずだ、だが再び黒い飛沫が集まり、人の形になった

炎の中の重油はのたくり、形を変え、まるで二メートルほどもある十字架を両手で持つような形になる

それは大きく両腕を振り上げると、俺達の頭の上に振り下ろした

上条は咄嗟に右手で受け止めた

上条が受け止めてなかったら、俺達は今頃炎の巨大な十字架に焼かれ、灰になっていただろう

炎の十字架は、上条の右手に触れたにもかかわらず、消えない

一目見れば、上条の方が押し負かされているようにも見える

いや、見えるだけじゃなくて、実際そうだろう

炎の十字架は、どんどんと俺達へと近づいてくる

上条の幻想殺しがきいてない・・・！？

そうか、分かった、きいてはいるんだ、実際こいつは一回消えたし、幻想殺しに反応しちやいる

でも消滅した直後に復活しているんだろっ、おそらくタイムラグは1秒の10分の1にも満たない

「上条！そいつは・・・」

俺が伝えようとしたところで

「分かつてる！！」

上条は答えた

この状況でよく考えれるな・・・

これで分かる事は、右手を封じられたってことだ

俺の分解でも再生には追いつかないだろうし、そもそもこんな炎を分解できるかどうかも怪しい

このままでは、俺達は灰にされる

どうにか突破口はないかと考えているところで

「ルーン」

と、声が聞こえた

明らかにステイル、上条、そして俺の声じゃない

だとしたら、誰の声かは分かるだろう

「神秘、秘密を指し示す24の文字にして、ゲルマン民族により2世紀から使われる魔術言語で、古代英語のルーツとされます」

俺は、信じられなかった

だって、誰かは分かっているのに、その誰かは確か血まみれになつてたはずだからだ

それなのに、何でそんな冷静なんだ？

「魔女狩りの王を攻撃しても意味はありません。壁、床、天井、辺りに刻んだルーンの刻印を消さない限り、何度でも蘇ります」

上条は、右手を左手で押さえ、辛うじて炎の十字架との均衡を保つ俺と上条は、同時に振り返った

そこには、1人の少女が倒れていた

だが最初に見たときとは違う、機械のような、あまりにも感情の欠落した瞳だった

言葉を口にする度に背中から血が溢れるのが分かる

まるでそれは少女の形をした、魔術を語るためだけの装置システム

「お、まえ、インデックス・・・だよな？」

上条が知っている少女、インデックスという少女とは違ったようだ

「はい、私はイギリス清教内、第零聖堂区―必要悪の教会所属の魔道書図書館です。正式名称はIndex-Libraryネセサリウス-Prohibitionインデックスですが、呼び名は略称の禁書目録で結構です」

俺は、淡々と語るインデックスに、寒気すらおぼえた

今襲い掛かってきている、炎の十字架を忘れてしまうほどに

「自己紹介が済みましたら、元のルーン魔術に説明を戻します。それは簡単に言えば、夜の湖に映る月と同じ・・・いくら水面を剣で切り裂いても意味はありません。水面に映る月を斬りたければ、まずは夜空に浮かぶ本物の月に刃を向けなければ」

そこまで言われると、目の前の魔女狩りの王のことを思い出した簡単に言くと、これは本体ではなく、これを動かす動力源があるということか？

車のエンジンと同じような、動力源が

だとすればその異能力を打ち消せば、この魔女狩りの王を打ち消せるのか？

「灰は灰に」

炎の巨人の向こうで、ステイルが右手に炎剣を生み出していた

「塵は塵に」

さらにもう一本、左手には青白い炎剣が音もなく伸びる

「吸血殺しの紅十字！」

言葉と同時に、大バサミのように2本の炎剣が襲い掛かる

二本の炎剣と、炎の巨人が激突し、一つの巨大な爆弾と化して大爆発を巻き起こした

俺はなんとか分解して防いだが、黒い煙が晴れると、上条の姿が見

えなかった

「!？」

「魔女狩りの王」

ステイルがそう呟くと、手すりを越えていった

「・・・そういうことか」

多分上条はてすりから降りていったんだろう

滅茶苦茶しやがるな

「君はどうするんだい？さっきの奴みたいに異様な力を持つてるみたいだけど、あいつが始末されたら次は君の番だよ」

俺は戦闘態勢に入る

「上条が絶対何かしらの突破口を掴んでくる、俺はそれを信じてお前を止めるまでだ」

「灰は灰に、塵は塵に、吸血殺しの紅十字!」

2本の炎剣が襲い掛かる

俺はそれを分散させるが、ステイルが炎剣を構え、突進してくる
炎剣を分散させようとしたが、さっき分散させた炎が巻きあがり、俺を囲む

それを分散させると目の前にステイルがいて、炎剣を振るっていた
分散させようとするが間に合わず、炎剣が爆発した

「ッー!!」

熱い

（細胞の結合・・・!!）

火傷した部分を治していく

だがそれは完全とはいわず、少しだけ治る

「火傷まで治せるのか、もはや魔術に近いかもね」

俺はステイルを睨みつける

戦闘経験の差、それは単純なものだ

俺は不良から逃げてただけの高校生に対し、相手は殺しのプロ、魔術師

差は明らかだった

でも、そんなくだらねえモンで諦めねえ

「炎よ・・・巨人に苦痛の贈り物を！！」

ステイルは炎剣を振るう

俺は後ろに跳んで、辛うじて避けた、と思ったが

瞬間、爆発して、俺の体が飛ぶ

「かッ・・・！！」

無様に地面に転がった

口の中に鉄の味が広がる

（火傷を・・・修復！）

ある程度、治す

「本当に不思議な力だね、でも力の差は歴然かな」

「舐めんじゃ・・・ねえぞ！！」

俺は、立ち上がる

上条の到着を待つて、突破口が開くと信じて

すると、突然火災報知器のベルが一斉に鳴り響いた

「！？」

ステイルは上を見上げ、俺も思わず顔を見上げた

スプリングラーが、人工の雨を降らしていた

「・・・なあ、ルーンって何なんだ？」

「・・・はあ、教えてやる義理もないんだけどね、紙に刻印を刻む

のさ、インクやらなにやらでね」

そこで、俺は気付いた

上条が火災報知器を作動させた意味を

ステイルは分かってないのか？

などと考えていると、キンコンというエレベーターの音が聞こえる

・・・きたか

そこには、上条当麻が立っていた

「そーいや、ルーンってのは壁や床に刻むモンだったんだっけな」

冷たい人工の雨に打たれながら、上条は続ける

「・・・ったく、参ったぜ、アンタすげえよ。正直、ナイフ使って

刻まれてたら勝ち目ゼロだったよ、こいつは周りに自慢したって構わねえぜ」

上条は天井を指差す、スプリンクラーを

「まさか、まさか！！3000度もの炎の塊が、こんな程度で鎮火するものか！！」

はぁ、と俺はため息をつく

上条は気付いたか、とでも言いたいような顔で俺に視線を送ってくる

「ばーか、炎じゃねえよ、テメエは人ん家^ちに何べたべた貼り付けてやがった？」

紙は水に弱い、幼稚園児でも分かる事だ

「魔女狩りの王！！」

叫んだ瞬間上条の背後から、炎の巨人がエレベータの扉を溶かしながら這い出てきた

「は、はは！あははははは！凄いよ！君ってば戦闘センスの天才だね！だけど経験が足りないかな、コピー用紙ってのはトイレットペーパーじゃないんだよ、たかが水に濡れた程度で完全に溶けてしまうほど弱くはないのさ！！」

ステイルは、気持ちいほどの笑みを浮かべた

でも気の毒だよなあ・・・まだ気付いてねえ

上条は右手で魔女狩りの王に触れると、完全に消え去った

「な、馬鹿な！！」

「まーだ分かんねえのか、注目すんのは炎でも紙でもねえよ、テメエは紙に何でルーンを刻んでやがった？さっきテメエで言っただろうが、インクだって、コピー用紙は破れなくても、インクは溶けるだろうよ、そんぐらい気づけ馬鹿」

ステイルは、さっきの笑みとは全く真逆に、あせった表情を浮かべる

「上条」

「なんだ？」

「個人的な恨み、返させて貰うぜ」

俺は、能力を発動する

「なあ、プラズマって知ってるか？」

「!？」

「超高温の気体では原子核と電子の結合が維持できなくなり、原子が陽イオンと電子に分解してしまう。それによって生じた電子と陽イオンからなる気体をプラズマっていうんだけどよ・・・俺にはそれができまうんだよな、俺の能力の本質がほとんど高電離気体プラズマに含まれてる」

俺の手の平を中心に、プラズマが形成されていく
そして

魔術師に向かって高電離気体プラズマが打ち出された
人を気絶させるだけの威力は充分だったろう

魔術師、ステイル・マグヌスは、科学に負けた
高電離気体プラズマキャノン砲ってどうだろう」

「・・・勝手にしろ」

台無し、自分でもそう思った

魔術師2人目？平和に話し合おうじゃねえか

夜

表通りから消防車と救急車のサイレンが鳴り響き、通り過ぎた

俺達は路地裏にいる、上条はしたうちをした、血まみれのインデックスを抱えたままで

インデックスを救急車に乗せることはできない

学園都市は基本的に外の人間を嫌う傾向があるから、そのために街の周りを壁で覆い、三基の衛星が常に監視の目を光らせている徹底ぶりだ

コンビニに入るトラックにしたって、専用のIDがないと話にならない

そんなところに、部外者が入院したら情報は一気に漏れる

そして敵は組織だ、そんなところを襲撃されれば被害が拡大するだけだし何より、治療している最中、最悪、手術中に襲撃されたら防御手段なんて何にもない

さて、どうしたもんかね・・・

「だからって、このままほっとくわけにもいかねえよな・・・」

「だい、じょうぶ、だよ？とにかく、血を・・・止めることが・・・できれば」

インデックスの口調は弱弱しく、ルーンについて説明した機械のようなものが嘘のようだった

「お前の10万3000冊の中に傷を治すような魔術はねえのかよ！？」

10万3000冊・・・さっきの機械のように喋ってた時に、魔道書図書館つー言葉が出てきたな

後から上条に聞いた話なんだが、どうやらインデックスつー少女は頭んなかに10万3000冊の魔道書を記憶してるらしい
その中に、回復魔術があれば俺でなんとかできるかもしれない

「上条、あつたとしても、お前の右手が打ち消しちゃう」
「……!!」

でも、俺なら

そう考えていたところで

「うっん、回復魔術、あるにはあるんだけど、超能力者、っていう時点で無理なの」

な……に？脳に開発を受けてれば、魔術は使えないってのか？

「魔術っていうのは、君達みたいに才能ある人間が使うためのものじゃないんだよ……才能ない人間が……それでも才能ある人間と同じ事がしたいからって、生み出された術式と儀式の名前が……魔術」

次々と口にする言葉が、痛々しく感じられる

上条が何かを叫ぼうとしたところで

「分からない……？才能ある人間と才能ない人間は……回路が違うの……才能ある人間では……才能ない人間のために作られた……魔術システムを使うことは……できない」

つまり、インデックスを救える魔術ってのがこの学園都市の人間には使えないってか

上条は絶句している

だが、俺はいち早く答えを導き出した

用は、脳に開発を受けてなきゃいいんだろ？

「だったら才能ない人間に頼めばいいんだよ、この学園都市は、学生しか脳の開発を受けてねえ」

「……そうか!!」

俺と上条は同時に思い浮かべただろう

身長135cmくらいの、クラスの担任、教師のくせに赤いランドセルが似合う1人の先生

月詠小萌の顔を

上条は青髪ピアスに小萌先生の住所を聞きだし、何で知ってるんだ

？という疑問を持ちつつも小萌先生宅に向かった

「ここか・・・」

着いた

でもここから先は・・・

「上条、ちよつとインデックスをこっちに向けてくれ」

上条は疑問に思いつつも背負っているインデックスをこっちに向けた俺は能力を発動させる

（傷の修復・・・）

僅かだが、傷がふさがっていく

上条は驚いた顔をしていた

「多分俺がこつから先に行っても役にたたねえ、多分お前も同じだろうけど、お前だけはそばにいてやれ」

それだけいうと寮に向かつて歩き出した

途中で上条に呼び止められ

「ありがとな」

とだけ言われた

（つて言つてはみたものの、やっぱり気になるなー戻っちゃうか？）
やはりインデックスのことを気にしていた俺は歩きながらそわそわする

同時に、妙な違和感を覚えた

・・・誰も、いない？

まだ街からいなくなるような時間帯じゃないはずだ、ならなぜいない明らかに異常だ

俺は辺りを見渡す、やはり誰もいない

おかしいだろ、今日は何の日でもないはずだ

何かイベントがあつたか？いや今日は何の変哲もない7月20日、イレギュラーがあるとすれば・・・！

魔術、その言葉が頭を過ぎった

他の魔術師がいたのか！？

もう一度辺りを見渡すと

「ステイルが人払いの刻印を刻んでるだけです」

・・・は？

さっきまでいたか？この女

いや、いなかった、暗くても何度も俺は見渡したし、間違いない俺が横を向いた瞬間に目の前に現れたのか？

それにステイルって言葉を口にした時点で、魔術師、ってことが

「ははっ、まーなんつーかあれだよな、・・・何のようだ？」

「率直に言っと、もう一つの名を名乗る前に彼女を保護したいのですが」

俺に言う事かよ・・・

「魔法名のことか・・・戦いたくねえってんなら話し合いなんてどうだ？平和でいいじゃねえか」

女はふむ、と考える

「そもそも俺は魔術に巻き込まただけだし、事情をよくしらねえ、保護したいっていつてるからインデックスの味方なんだろうけど、俺は敵と思ってた、そこらへん詳しく話してくんねえかな？神裂」女は名前を呼ばれてびっくりしている

ステイルが神裂が斬ったとかそんなことをいつてたから、間違いないと思った

まあな、2メートルもある長刀を持っていたら誰だってそう思うわ「保護する理由、ですか」

そこで一旦区切り

「完全記憶能力、というのは知っていますか？」

「雨の一粒一粒から、見た人の顔まで、覚えたくないモンまでしっかり記憶しちまうってやつだな」

そこまで言っただけ

インデックスは完全記憶能力なのか

10万3000冊を頭に記憶してるって時点でおかしいとは思ったよ、そういうことか

「そうです、だから彼女は1年単位で記憶を消さないと、死んでしまうんです」

「は？そりやどういうことだ？」

「彼女の脳には10万3000冊の魔道書が記憶されている、脳の85%が10万3000冊にとられています、残る15%の思い出をえぐらなければ、彼女は崩壊してしまう」

「いや、有り得ねえだろ」

「うーんと、それは何か違う気がするんだよな、人間って140年分くらいの記憶が可能なんだ、完全記憶能力ってのは何もインデックスだけの話じゃないけど、15%で1年分しか記憶できないってどういうことだ？それだと6歳か7歳で死んじゃうって計算になる、確か記憶ってのにも種類があって言葉や知識を司る意味記憶、運動の慣れなんかを司る手続記憶、思い出を司るエピソード記憶ってのがな、それぞれの記憶はいれものが違うんだ、例えばさ、記憶喪失になっても赤ちゃんみたいにはぶばぶ言ってハイハイしねえだろ？つまりいくら10万3000冊を記憶して意味記憶を増やしたところでな、思い出を司るエピソード記憶が圧迫されるなんつーことは脳医学上絶対有り得ないことなんだよ、多分お前等は上に騙されてんだろうな、10万3000冊を記憶してるのなんて敵になったら厄介だ、だから教会は仕掛けをしたんだ、一年置きに教会の技術と術式を受けなければ、死んじゃうってのをな、教会が元々何も問題なかったインデックスの頭になにか細工したんだ」

「分かったか？と俺は付け足して、去ろうとする」

「あーそうそう、こっから真っ直ぐ行きやすぐにインデックスのところに着くはずだ」

「・・・なぜ、教えるのですか？」

「あんだだけ教えてやって、まだ記憶を消そうとする奴には見えねえからだよ、例えそうだとしても、上条が絶対止める」

俺が寮に戻っていこうとすると、神裂が頭を下げてきた

俺は頭を下げられるようなことはしてねえよ

いない子、違う!!

俺は寮に帰ってベッドで寝ていると、携帯の着信音で起こされた
どうやらメールのようだ、俺はそばに置いてあった携帯を開き、半
開きの目をこじ開け、メールの内容を読む

上から下へと、メールの文面を目で追っていき、読み終わると携帯
をたたんで机に置いた

俺はベッドから降りて洗面台に向かい、ぼさぼさになった髪を整え
ながら目を覚ましていく

さっきまで寝ていたためか、まだ目は半開きで、眠そうな顔が鏡に
映って自分でも情けないと思うような顔をしていた

その目で時計を見て時間を確認する

夜中12時過ぎ

今更だが、夜中に自分の特訓のために呼び出すなんて気が引けるよな
そう、メールの送り主は学園都市第3位、超電磁砲の異名を持つ御
坂美琴である

特訓をつけてくれーと言って、都合の合う日に連絡をしてくれとい
ったものの、やはり女の子を夜中に呼び出すのはなんだかなー

夜更かしはお肌の天敵だし、お肌が荒れてしまうかもしれない
もしそうになったら俺の能力で治してやるしかないのだが

火傷も修復できたし、それくらいはできるだろう

できなかったら土下座という選択肢しかないわけだが

俺は特訓場所である鉄橋に向かう

そもそも俺は何で高電離^{プラスメカノン}気体砲なんてできたんだろう

確か俺は低能力者だったはずだし、いやはずじゃなくて低能力者だし
高電離^{プラスマ}気体は低能力でできる芸当じゃないから、実際は強能力者だ

ったとか？

有り得ない、かな？

知らん、俺は研究者じゃないしな、自分の体のことも分からないっ

てどうかと思うけど

まあ強能力者であったとしても、ステイルには勝てなかっただろうけどな

勝てたのは、上条がスプリングラーを作動させてくれたおかげだ俺はやられてただけだしな、いいとこどりもしたし

あれ？よく考えたら俺いらない子？いらない子だね、いらない子です自分で言ってて涙が出てきた、悲しい

などくだらんことを考えてるうちに鉄橋についた

正確な特訓場所は鉄橋下の・・・河川敷、っていうんだっけ？そこなんだけど

そこにはかの御坂美琴が立っていた

あら、俺が特訓してもらうのに先にきてくれるなんて、お兄ちゃん感激

「悪いな、び・・・御坂」

ビリビリ、と言おうとしたところを急いで修正する

流石に一文字では気付かなかったみたいで普通の態度で接してきてくれた

あぶねえ、俺一步間違えたら消し炭だった

「遅いわね！！待ちくたびれたわよ！！」

待ちくたびれたって・・・あーそういうこと

「ここからメールしてくれたのか？悪かったな、待たせちゃって」
うんうん、可愛いトコあるじゃん

「う、うるさいわね！！さっさと始めるわよ！！」

御坂は地面にある石を拾い上げる

一度上に投げてパシッと受けると

「これは分解できたりするの？」

「分からん、砂を巻き上げる程度のことしかしたことないしな・・・

・やってみる」

「じゃあ、ほい」

御坂はいきなり石を投げてきた

俺は石に向かって手を差し出し、能力を使う
そして

パシッ、と手に何かがあたった
反射的に受け止めると、それはひびが入って今すぐ割れそうな石だった

・・・低能力でも、ここまで弱いのか？

「・・・想像以上の弱さね・・・」

「う、うるさい！俺も予想外だよ！！ここまで弱いなんて！！」
まさか石にひびを入れる程度だとは！！本格的に死にたくなってきた！

「く、くそ、まさかここまで役にたたないとは・・・」

そこで俺はひらめいた

何で俺はあの時能力を使えた？

そうだ！対象が強かったんだ！！

それとあの時は滅茶苦茶怒ってたし、あれだ、怒ったり何かしたりしたら強くなるタイプなんだ！

そうと決まれば

「御坂！俺と戦ってくれ！！」

「え？アンタ石も割れないのに・・・」

「いいから！！」

俺はしつこく懇願すると、仕方ないわね、と言ってやってくれることになった

「怪我しても、知らないわよ！！」

ダン！と足をあげて地面を踏むと、電撃が飛び散った

俺は能力を使用する

（集中！やれば出来る子やれば出来る子やれば出来る子！！）

直後、辺りに黒煙がまった

「・・・やつちやったかな？」

という御坂が声を出したと同時に

黒煙がブワッ！！と一瞬で晴れた

「ゲホツゲホツ！！まだ加減が難しいな・・・」

「ど、どういうことよ・・・石を割れなくて電撃を防げるって・・・」

「よしっこい！！！」

俺は次々とくる電撃を防ぐ

俺すげえ、やべえ、気持ちい！

砂鉄の剣、電撃の槍、全てを防いだ

「本当にどうなってんのよ！！！」

再び御坂が電撃を放つがそれも防ぐ

「次は攻撃にうつるぜ！！！」

俺は今日の感覚を思い出し、高電離気体を作り出す

御坂は大層驚いた顔をしている

「うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！高電離気体砲！！！！！！！！！」
高電離気体砲！！！！！！！！！！
高電離気体砲！！！！！！！！！！

放った

高電離気体砲

高電離気体砲は御坂に一直線に向かっていき、直撃した

・・・はずなだけどなあ

「なんで電撃使い相手に電撃で挑んだんだよ、俺」

そうだ、超能力者の電撃使いともなれば、電撃なんてきかないに等しい

「選択肢ミスった・・・」

「アンタって、馬鹿なの？」

「多分」

その後も攻防を繰り返したが、次に目を覚ましたのは病院のベッドの上だった

俺、いつの間に病院に？

ちくしょう、そうだった、防げてるからって調子に乗ってたら思わず喰らっちゃまって、気絶したんだ

丁寧に病院まで運んでくれて、お礼言わないとな

などと思っていたら、隣の病室から聞きなれた声がした
インデックスと、クラスメイトの上条当麻の声

俺はベッドから降りると、隣の病室に向かっていった
その途中で、頬を膨らまして怒った様子のインデックスが出てきた
インデックスは俺の顔を見ると

「あ！私を助けてくれた人だよ！？ありがとう！」

あーそうか、俺の顔見てたのか

完全記憶能力つてのはすげえモンだな

「どういたしまして、つつても俺はそれらしいことは何にもしてや
れなかったけどな」

「そんなことないよ！！」

といって、インデックスは明るく笑う

この子、天使やあ！！

「俺は上条に用があるから」

俺は病室のドアに手をかけて、扉をひらいた
そこには上半身だけをベッドからずりおろして、両手で頭を押さえ
てなっている上条がいた

死ぬ、これはほんとに死ぬ、とかいう独り言が聞こえてきたので、
寒気がするほどリアルに怖い

「な、何やってんだ？お前」

上条に声をかけると、上条は首だけを動かして俺を見た

一瞬の沈黙から、上条は

「助けてください」

「もう一度聞くけど、何やってんだ？お前」

「インデックスさんにやられてしまったんですよ、ううー不幸だー」
よいしょ、と体をベッドに戻すと、再び俺の方を見た

「上条、何かお前変じゃないか？」

「そ、そんなことねえよ」

「ならば上条、俺の名前を言ってみろ」

沈黙

「・・・はあ・・・何か記憶喪失みたいだな、特に気にしねえけど、無理してんじゃねえよ」

上条は、否定をしようとしたように見えたが、できなかったようだ

「できる範囲なら俺も協力してやる、一人で片付けようとすんなよ」
俺は上条に背を向けて歩き出す

そして扉に手をかけたところで

「俺の名前は夏野太陽だ、覚えとけ」

そういつてから病室を出て行った

何よ、この巫女さん（前書き）

時は8月8日

と行きたいところだが、まずは俺の現状について語らせて欲しい

何よ、この巫女さん

ピタリと、御坂からの連絡がやんだな

いやなんだ、あの後も数日くらい特訓に付き合ってもらってたんだけど、8月に入る辺りからピタツとやんだんだ

あーちなみに補習などというものは28日に終わっている

当然上条にも教えたし、今頃は有意義な時間を過ごしているに違いない

・・・まあそんなことを不幸少年がかみじょうとつままできるはずないのだから、かくいう俺も充実した毎日、といえば嘘になるのだが

夜中には御坂と特訓、これが買物とかだったなら青春といえるが、生憎特訓だコンチクショウ

そんでたまに上条と遊ぶとなると、いつも不幸なことになる

退屈しねえよ、いつも言ってるけど退屈しないぞますよ！！

ですが何で不良に追いかけられるのが日常茶飯事になってるのでございましょう！！？

あーもうちくしょう、というわけで俺は今、いつもの場所で特訓しているのだが

・・・もう俺はトラブル体質認定、ってことでいいよね？

不良さんが10人ほど私目を囲んでらっしゃってる

ふ、ふふふ、いいぜ、丁度実践したかったところなんだ

かかってきやがれ無能力者風情が！！俺がまとめて片付けて

「熱ッ！？」

パイロキネシスト
発火能力者！？やべえ！！どうにかしねえと！！

「兄ちゃん、痛い目にあいたくなかったら金だしな」

群れねえとなんにもできねえ野郎どもが！！男なら1人できやがれクソツタレ！！

・・・なんてヘタレの俺がいえるわけがなく、静かに演算を開始する
そもそも俺の能力は演算の時間は必要がないはずなのだが、それは

戦闘の時だけである

このように日常的、つってもおかしい気がするけどそこらへんはスルーして、まあそういう時にはどうも演算に時間がかかり過ぎる即座にできることつつたら砂埃を巻き上げるくらいで、俺はそれに気付かなかっただけで演算次第ではなんか色々できる

特訓の間に気付いたことなんだが、まだ慣れてない、4日5日そこからで習得できりや苦労しねえわな

というわけで俺は戦うわけではなく逃走のために演算しているのだ用はこいつ等の何人かを吹き飛ばせば逃げ道ができる

っーことは突風を巻き起こせばいいんだ

・・・俺の能力って、レベル高けりや絶対強いのにー

「痛い目にあうのは、そっちだ馬鹿!!」

俺は時間を稼ぐために話術を使う

「ああ？俺の力が見えなかったのか？ならもう一度ぶっ放してもいいんだぜ？」

「相手のレベルがどれくらいかも確認せずに、喧嘩売るってな、ちよつと無謀じゃねえか？」

完了、突風！

「うおっ何だ!？」

不良の何人かが吹き飛ばされていく

「今じゃ!!ハッハッハ!!馬鹿め!!貴様等のような雑魚に力を振るうまでもないわー!!だから許してください!!金だけは!!」

逃走開始、フッフ、俺は上条と逃げた回数は数知れず!!貴様等には捕まえられんよ!!

半ば泣き笑いしながら、俺は夜の街をかけていくのであった

そして、時は8月8日

俺は今安っぽいファーストフード店にいる

何か空腹を紛らわすもん欲しいなーと思ってきたのだ

元々財布の中身はもの凄く寂しいので、痛い出費はできないのだが飯のためとあらば仕方あるまい

低能力者なだけましだろうが、それでも奨学金が少ないのは確かな事実なので受け止めるしかない

とか考えているうちに上条達が店に入ってきた

定員さんに何か聞いた後、俺のところに向かってきた

「よう上条とインデックス、それと青髪ピアス」

「僕ついで!？」

「よう夏野」

「久しぶりなんだよなつの!」

ちなみにインデックスには俺のことは苗字で呼ぶように、と言っている

俺は下の名前で呼ばれるのが好きじゃないし、気に入ってもない

何故ならば単純にださいからだ

これは両親に謝っておきたいところだが、もっと他の名前はなかったのかと問いただしたくなる

上条は俺の向かい側の席を見た瞬間、固まってしまった

まあそうだよな、それが普通の反応だ、よかった上条がまだ普通にインデックスは俺の隣に座って、シェイクをすすっているのだが、上条が気にしているのは俺の向かい側であって、インデックスではない

青髪ピアスは目を輝かせているが、インデックスのシェイクをすすめる姿が可愛かったから、というわけではないだろう

可愛くはあるのだが、それは置いといて

俺の向かい側には正体不明の巫女さんが突っ伏している

な?俺は気にしないことにしてたんだが、初めて見たときは上条みたいな反応だったさ

いやだって、こんなところに巫女さんがいたら、しかも突っ伏してたらびつくりするだろ

びつくりするの度を越える気がするけど

青髪ピアスが目を輝かせているのはシスターさんと巫女さんの組み合わせを素敵と考えているからだろう

とりあえず手を出すようなことがあれな鉄拳をお見舞いしてやるが、そんなことはないようなので放置

「く――」

唐突に、巫女さんが口を開いた

ゴクツという音がした、それが自分のつばを飲み込む音と分かったのは後の話

なんだか、上条と気持ちがリンクでもしているのだろうか、とてつもなく不幸な予感がした

動くぞ、まだ巫女さんの口が動くぞ

次の言葉を発したのは、堅苦しい沈黙が過ぎ去ったあと

「――食い倒れた」

・・・え？

ここは満員満席のファーストフード店

机には俺と上条とインデックスと、青髪ピアスがいる

うん、これだけならただの学生の日常に知り合いのシスターさんが飛び込んできてほえましいともとれる状況だろう

なら、なぜそこに巫女さんがいて、「食い倒れた」などどう返事を返せばいいのか謎な言葉をかけてくるのは何なんだ！？

巫女さんは俺と同じ年くらいで、スタンダードな巫女装束に腰まである黒髪と、巫女さんといえば？とそこらへんにいる人に聞いた時に思い浮かぶような、型にはめて作ったみたいな巫女さんだ

いまだ滅茶苦茶気まずいような、妙な空気が漂っている中、この空気を打ち壊すべく対象に選ばれたのが

「・・・な、何だよ？」

やはり、上条である

「・・・ほらカミヤン、話しかけられたからには答えてやらなっ！」

「そうだよそうそう、とうま、見た目で引いてはいけません、神の

教えに従いあらゆる人に救いの手を差し伸べるのですなんだよ、アーメン」

「・・・なっ、ばっ、ふざけんな！！ここは公平にジャンケンだろ！？」

「やめとけ上条、お前の不幸体質じゃ負けるのは目に見えてる」

俺が忠告したのにわざわざジャンケンをして、1人負けという悲惨な結果に終わった上条は巫女さんに話しかける

「あの、もしもし？」

上条が突っ伏した巫女さんに話しかけた瞬間巫女さんの肩がピクリと動いた気がした

まあ気のせいではないだろうが、これで反応がなかったら上条は相当不幸だったであろう

「あ、えーっと、食い倒れたって何ざましよ？」

おいざましよってなんだ、初対面に対してざましよはねえだろざましよは

ま、いいか、巫女さんは何か聞いてほしいに違いない、だとしたら机に突っ伏してるなんてことはないだろう

「一個58円のハンバーガー、お徳用の無料券がたくさんあったから」

「うん」

正直このハンバーガーはお勧めだ

味とかそういうのは期待しないでほしい、なんせ低能力者ごときの奨学金で買えるのはたかが知れてるからだ

お勧めできる、というのは金欠時の非常食用という点である

ちなみにハンバーガーはぺちゃんこの肉としおれたレタスしかはさまっていない

だが金欠時に腹を満たしてくれる材料という点では充分だった

次に巫女さんが口を開いた時に言ったのは

「とりあえず三十個ほど頼んでみたり」

「「お徳すぎだ馬鹿」」

俺と上条が口を揃えて言った

だってさ、んなもん突っ込むしかねえだろ

でも巫女さんはその言葉を聞いた瞬間ピクリとも動かなくなってしまった

無言であるからそれがもの凄く傷ついているらしいことが分かる

いや、流石に、同時に突っ込んだのは悪いと思っっている

そこで上条が訪れた沈黙を打破すべく

「あーいや、違うんだ、言葉が足りなかった、馬鹿だ、しかし何故そんな事を？、という会話を一連の会話を円滑に進めるものであり乱暴な言葉遣いは親愛の証で決して悪意ある台詞ではないそれと業務連絡そのシスターと青髪は後で顔貸せそんな目でこっち見るなー！！そして夏野、テメエも言ったくせに俺に全部任せんじゃねえ！！」

よくやった、俺はお前を褒めてやる

もちろんそんなことを言われたからって会話に参加するようなことはしないのだが

「やけぐい」

動かなくなった巫女さんはそのまま不意にそんなことを呟いた

「は？」

「帰りの電車賃400円」

うーん、読めた、馬鹿な上条さんは分からないみたいだけど

「つまり、買いすぎちまって帰りの電車賃が足りなくなっちゃった、と？」

「残金、300円」

こりゃあ馬鹿だ、と言いたるところだがまたさっきみたいなことになつたら敵わんからやめておく

あーくそ、痛い出費だけど、ここはしゃーねー

「貧乏学生代表夏野、100円をお貸ししますよ」

俺はそういつてから巫女さんの手に100円を握らせる

その行動はお母さんが子供にお使いを頼む時の動作に似ているよう

な気がする

巫女さんは俺に一礼すると、そのままどこかへ去っていった
その後に馬鹿の青髪ピアスが騒ぎ出したが、おいておくとう

俺って、本当につくづくトラブル体質だと思う

俺は今日不幸な出来事に巻き込まれるのはごめんなので、寮に帰ることにした

んで、寮に帰ったら、トレーディングカードのようなものが通路に貼り付けてあった

うん、ルーンなんだけどね

これで思い浮かぶ顔といえばステイル「マグヌス
かつて上条と共に倒したルーンの魔術師

炎を扱ってたなーあの時は熱かった

そこでここにルーンが張ってあるってことは、何かあるってわけでここにステイルがいないってことがおかしい

俺は寮から外を見ると、ステイルと見覚えのあるツンツン頭の少年を見つけた

「追跡開始、つとな」

今思えば、こんなことしなけりゃよかったと心底思うんだがな

ここって確か三沢塾だよな・・・？

ビルという名の、三沢塾

いや、三沢塾という名のビル？

知らねえ！！もういい！！

ステイルと上条がビルに入ってたので後ろからついていくことにした

・・・てか何で俺こそそそしてんだ？

いやいや今はついていくことが先だ

うん？何か一応最上階まできたけど、戦闘の様子はないな

なにやら巨大な扉がこいといわんばかりに開いてるし、どうすりゃいいんだろう

そもそも戦うとかそんなことなのか？もしかして平和的に話し合おうとかそんなことかもしれないし

・・・それはないが、何故なら前に上条が必死に逃げてる姿を見かけたからだ

上条はこつちに気付いて「なんでここに！？」といった後「まあいいや、助けてくれ！」と喋ってきたのだが笑顔で手を振ってスルー幸福を祈る、無理な話だが

そんで上条はまだここについてないのか？うーんどうすつかな

最終目標がここであるかも分からないんだしどうすればいいのか・

待つとくか

「つてできるかボケエー!!」

扉のある部屋に突入すると、そこには緑色の髪の方がいて、インデックスが寝かされていていつぞやの巫女さんがいた

「あれ？巫女さんがいる、それにインデックスも？」

「君は、何を・・・？」

何をつて言われても・・・

さあ、なんだろうな？何をしにきたかも分からないんだし

男は何か俺のことじつと見てるし、やべ、何かやばい、最近の直感でやばいつて分かる

そして男がどう判断したか知らないが銃を構え、俺に発砲してきた「は？」

うん、そうなるよ、だってね、銃がね？バーンってね？

分解したから問題ないけどさ、問題あるよ!!

「穏やかじゃねえな・・・」

さて、この状況

インデックスと巫女さんが捕まってるって判断した方がいいのか？

うーん、だとしたら・・・

魔術師確定じゃねえか

インデックスがいる時点でそうだしなー俺魔術に疎いから全然分か

んねえよ

対策法なんて分からないし、そもそも全部が全部分からん

上条、早くこい、今すぐこい、ほらほらこい

・・・俺の叫び（心の中での）は虚しく、やはり心の中だけで響き、
一人で虚しくなるのであった

どうするかなー逃げるってのはできねえだろうしそもそもこの状況を見て逃げるってのは、どうかと思うし

勝てるわけないし

上条がくるまで待つとか・・・ここが最終目的でいいみたいだし早くこい!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

心の中でもう一度叫ぶ、すると

「ふむ、その目を見る限り私の目的には気づいているようだ」

男はつまらなそうに吐き出す

え？何？目的って何よ！！勝手に推測するんじゃないわよ！！！！

しかも推測するとしても何から推測するのさ！目を見る限りって何さ！！

などと心の中で叫んでいると、男の視線が俺に向けているものではないと気付き、俺の後ろに向けられているものだと気付いた

俺は後ろを向くと、そこにはステイルと上条がいた

2人とも俺に何か言いたげだが、あえてここでは語らないのだろう。上条には後でこつてり絞られるかもな、確定だけど

「ならば何故、止めようとする？ 貴様がルーンを刻む目的、それこそが禁書目録を助け救うただけだろうに」

男は視線を下に落として、インデックスを見る

視線があっちこっちにいつて忙しい奴だ

かくいう俺も思考を働かせて忙しいのだが

俺1人置いてかれてる感ハンパネエ

「簡単だよ、その方法であの子は救われない、失敗すると分かつている手術に身を預けられるほど、その子は安くないんだからね？」

「否。貴様のそれは嫉妬だろう、自然、今までは共に夢を失い絶望

した同志だったが、1人出し抜くとあつては満足できん、くだらん
とは言わん、私の妄執も原理は同じだ」

・・・まあステイルからしたらどうなんだろうとか思っけどさ
男も、ステイルと一緒に感じなのだろうか

上条から聞いたけどステイルは記憶を失う前のパートナーだった
神裂は親友、だったか

だとしたらステイルより前のインデックスのパートナーか？

今代のパートナー上条がインデックスの首輪をはずしたわけだから、
ステイルと目の前の男は報われない・・・

そればかりか目を開けたインデックスは前のパートナーの男など見
ずに、今代のパートナー上条の名を呼ぶ

果たして、それはどれだけつらいことなのか？

俺にはわからない、なぜなら低能力者だし、凡人だし、トラブル体
質だし、魔術のこと知ってるっていても全然知らないし

あらゆる意味で、凡人、上条みたいなイレギュラーを持っているわ
けでもなければ、とびきり強いものを持っているわけでもない

能力は低能力者で、役にも立てない

でも、だからどうした

力がなかったら戦えない？そんなことはねえ

相手がはつきりしてりゃあ問題ねえ

吸血鬼、とかそんな話が出てきてたな

インデックスを人じゃない存在にする、とか

そんなことをしようとしてたなら間違いなく敵だ、たとえ前のパー
トナーだとしても

うん、充分だよな、戦う理由ってのは

倒すべき相手が決まってるりゃ、何の問題もねえ

うん、無茶しちゃったと思う

「倒れ伏せ、侵入者共！！」

男の怒号が広い部屋に響き渡った

一瞬何言っただこいつ？と思ったが、そんな考えは次の俺の状態に気付いてから、ぶち壊された

何十本もの重力の手におさえつけられた感覚を覚え、地面にひれ伏した

侵入者共、といったことからすると上条やスタイルも含まれているのか、なんとか視線を後ろに向けると、上条とスタイルも俺と同じ状況にいることが分かった

こいつ、言っただ事を本当のことに？

いや、さっき俺が入ってきた時銃を撃たれた

でも銃は突然男の手に握られて、発砲された

ということとはわざわざ口にする必要がないってことか？

でもこれだけじゃ確信とは限らない

・・・なんて考えてる場合じゃないんだけどな

俺の内臓はギリギリと締め付けられる感覚に襲われ、吐き気がしてくる

それだけじゃない、まるで体の全部分を締め付けられてるような、そんな感じがして身動きがとれない

全力で力を入れて、やっと動かせる程度のところか

「は、はは、あははははは！！簡単には殺さん、じっくりと私を楽しませろ！！私は禁書目録に手をつけるつもりはないが、貴様で発散せねば、自我を繋げることすら叶わんからな！！」

男は懷から髪の毛のような細い鍼を取り出す

震える手で、首筋に鍼を当てると、まるで体内にあるスイッチを押すかのごとく、鍼を突き刺した

そのまま体に取り付く虫をなぎ払うように、鍼を横に投げ捨てると、

ナイフのような鋭い目線で上条を見た

悪寒

まだ俺は男の能力が分かってない

未知の力を使われることへの恐怖、といったところか

自分でも肩が震えていることが分かった

鍼を突き刺したのは、攻撃の合図か

俺がくるであろう攻撃を覚悟していると

「待って」

そこへ、巫女さんが立ちふさがった

両手を広げ、上条の盾になるように

「ひめ、——」

危険だ、それくらい上条でも、ド素人の俺でも分かる

上条は何か言おうとしたが、中断した

何かを告げるためだったのか、だとしたらそれを告げるのを何故や

めたのか？

俺にはわからないが、助けようにも動けない

「邪魔だ女」

それを言った男の両目は、本気だった

このままだと死ぬ、そう確実に思わせるほど、殺意に満ちた目

押さえつけられてなくても、多分動くことは不可能とされていた

だろう

やはり、プロ、素人とプロでは埋めれない隙間がある

それを痛感させられる目

俺は力を振り絞って右指に力を込める

何か、この状況を引っくり返すことはできないか！？

俺が考えている時に、上条が動いた

そうだ、上条の右手には異能の力を打ち消す効果がある

後は上条が巫女さんを助けて、男を殴り倒して黙らせれば、不思議

な力は・・・

「死ね」

その言葉を聞いた時、確かに時間は止まっていた

もしこいつの力が言った事が本当になるのだとすれば

巫女さんは、死んだのか？

いや、おかしくはない、あいつにとっては当然のことなのだろうが

・・・理解できねえ

そんな力だとすれば、巫女さんは死んだことになる

死因は分からない、ただ、死ぬ

電池が切れたように、魂がそっくり肉体から抜けて離れていったように

悲鳴すらも、上げられなかった

巫女さんの体が、ぐらりと揺れる

後ろへ向かって仰向けに

今上条には巫女さんの顔が見えているだろう

上条は、巫女さんの顔を見ると、驚愕、といった表情だろうか

くっそ、俺も今すぐ巫女さんに飛び掛ってなんとかしてやりたい

力が・・・低能力者なんて、力がねえから・・・

「ふざけんじゃねえぞ、テメエ!!」

上条は巫女さんの体を両手で抱えた

上条の右手は、死をも打ち消せるのか？

巫女さんに触れずとも、なぜか理解できた、巫女さんの鼓動が聞こえる

「な・・・我が金色の練成を、打ち消した！？有り得ん、確かに姫神秋沙の死は確定した、その右手、聖域の秘術でも内包するか！」
どうでもいい

ただ今は、こいつをぶっ倒すためのだけの力が欲しかった

そりゃ同情もした、前のパートナーのあいつが、目の前にいるインデックスに忘れ去られ、目的を失ってでもインデックスを傷つけられない男の姿を見た時には、本当にこいつに拳を振るってもいいの
だろうか？と思うくらいに

だがどうでもいいんだ、そんなことは

こいつは今確実に巫女さん・・・姫神秋沙を殺した

その手で、訳の分からない能力で

それだけで俺が拳を握る理由は充分、こいつを気の済むまで殴って責める奴が、どこにしようか？

俺は、全力で全身に力を入れる

少しずつ、少しずつ確実に、立ち上がっていく

膝に手を置いて、腕に、足に、腰に、全てに力を入れて

「っはあ！！！」

完璧に、立ち上がった

「ばか、な、貴様等は何だ？私の黄金鍊金《アルス・マグナ》を覆すようなことを・・・」

「知らねえよ、テメエの黄金なんたらがどうだとか、テメエの目的がどうだろうが、そんなモン全然関係ねえ、ただお前は姫神を殺そうとした、それだけで俺が拳を握る理由は充分だ」

上条は俺の方を見て、ニヤツと笑う

上条は右手で俺に触れると、上からかかっていた重圧が消えうせた同時に、上条が口を開く

「いいぜ、アウレオルス・イザード、テメエが何でも思い通りにできるってんなら、まずはそのふざけた幻想をぶち殺す・・・ッ！！」

俺も、上条の言葉にニヤツと笑う

「さあ始めようか鍊金術師、ここにいる上条当麻という有難いお方が、テメエのくだらない幻想をぶち壊してくれます・・・だから、ぶち壊すには、やりやすいようにしないと？」

一回区切って

「俺は、テメエのふざけた幻想を気の済むまで分解^{バラ}してやる」

視線を、鍊金術師に向ける

これが戦闘開始の合図となった

「窒息せよ」

上条と俺が爆発的な勢いで踏み込んだ瞬間、アウレオルスが口を開くそれと同時に、息苦しくなった

窒息死・・・落ち着け、考える

あいつは明確な死因を言ったんだ、姫神のような時じゃなくて、窒息して

なら話は簡単、俺がどうにかそれを分解すりゃいい

窒息、つーことは息が詰まって死ね、つったんだ、なら・・・！！

俺は喉の違和感を、分解する

喉を無理矢理こじ開けた感覚が襲ったが、息はできるようになる

「っはぁ・・・！！」

「感電死」

5秒くらいの間から、アウレオルスは言った

俺の四方八方を青白い電光が取り囲んだ

これなら簡単だ、単純な分解をすりゃいい！！

電光は俺に触れる前に、弾けとんだ

「絞殺、及び圧殺」

何十本ものロープが現れ、俺の首を絞めつけると同時、錆びた廃車が振ってくる

無駄、ロープを分解、車を分解

通用する・・・俺の力は確かに通用してる！！

俺はこいつ相手に拳を握れる

それに、突破口も見えてきたしな

何か俺、いらなかった気がする

小説本文　まあ俺だけじゃないのね、死の危険にさらされたのは上条もちろん窒息死しかけたり、絞殺されかけたり圧殺されかけたりしてたよ

でも全部右手で防いじまったのさ、なんという右手、羨ましいさて、ここで上条は矛盾点に気付いているだろうか？

あいつは窒息死、とか言っただけで何も人物の特定はしてない全員のことを指すにしても、ステイルはそういう状況になってなかった

言葉にしたことを実現させるのなら、人物を特定しなきゃならんなのにあいつは窒息死やら絞殺やら圧殺やら

こりゃ考えたことを実現させてると思えないそれをわざわざ口にしてるのは考えてるって知られたら弱点が見つかるからだ

そういう力は心理戦に滅法弱い

こいつには勝てるはずがない、とか思わせたら実際勝てるわけがなくなっ……

えっとつまり、そういうこと

「なるほど、真説その右手、私の黄金練成アルスマグナも例の外に洩れず打ち消しているらしい、そっちの少年の力はまだ分かんが」

あーなるほど、そうね、そういうことね

上条は右手で触れられなければ打ち消せない、つまり

「ならばこそ、右手で触れられぬ攻撃なら打ち消す事は不可能なのだな？」

そういうこと

えっ、ちよっそれって上条死ぬじゃん

やべえ！！どうにかしねえと……

「銃をこの手に、弾丸は魔弾、用途は射出、数は一つで十二分」

錬金術師は滅茶苦茶楽しそうに細い鍼を自分の首筋に突き立てる
アウレオルスが軽く右手を振るうとその手には一振りの剣が握られていた

あれ？銃じゃなかったっけ？

一見王子様のレイピアみたいに見えるけど・・・いや、違う？

銀の鐔があつて、海賊が使うみたいなフリントロック銃が埋め込まれてる、暗器銃、か

あつやべ、んなこと解析してる場合じゃないし！！死ぬし！！

「人間の動体視力を超える速度にて、射出を開始せよ」

アウレオルスがレイピアよ横に一閃した瞬間、火薬の炸裂する音が耳に響く

上条の方を見ると、何かが頬を浅く切り、次に何かが壁にぶち当たり火花を散らす轟音が鳴り響いた

見えなかった、人間の眼球に、魔弾を捉えるほどの性能を期待するなんて、間違っちゃいるんだが

そもそも見えなけりや対処法はない

俺の力にも限りがあるし、何かさつきから頭がふらつくし・・・
なんて考えてた時には、アウレオルスが首筋につきたてた鍼を横に投げ捨てて

「先の手順を量産せよ、10の暗器銃にて連続射出の用意」

言った瞬間、アウレオルスの両手には、それぞれ5丁ずつ、10本もの剣の仕込み銃が広げて握られていた

・・・あれ、射出されたら避けれないし、防げないよね？

逃げる！！

無駄かもしれないけど何にもせずに死ぬよりまし！！あれ？俺諦めてねえ？

俺は横に転がろうとしたけど、確か後ろにはステイルがいたよな？
上条も同じ状況におかれてたみたいだ

「馬鹿が！何を立ち止まってッ！！」

テメエ、俺は心配してやってんのによ

「準備は万端、10の暗器銃、同時射出を開始せよ」

アウレオールの言葉と、青く輝く魔弾が俺に直撃するのはほぼ同時だった

まるで鉄拳のような衝撃が、俺の体に走る

「がっ……!!」

あれ、あんまり威力がない？

俺死んだと思ったのに、早くも二度目の死を迎えたと思ったのになどと思いつながら後ろに数mほど吹き飛ばされたんだが

どうやら骨の砕けた部分はなく、全身は動かせる、もっとも激痛はあるが

そついや言ってたな、簡単には殺さないって

なんだよ……よかった、俺死んでない

「……チツ、何だそれは？先の記憶操作や一連の攻撃を見る限り、本当に言葉の一つで思いの通りに現実を歪めているみたいじゃないか」

ステイルが言葉を発する

馬鹿が、テメエも気付かねえのかよ

俺は間違いを否定しようとしたが、うまく言葉がでない
多分周りから聞くと、何言ってたんだコイツ？と思われても仕方のない言葉となっているだろう

「ふん、黄金錬成アルスマグナなど錬金術の到達点に過ぎん、確かにその到達には困難を極めるとされているが、到達点である以上は道をたどっていけば辿り着けるのは道理だろう」

「馬鹿な、黄金錬成アルスマグナは理論が完成しても呪文が長すぎて、100や200の年月で完成させられるはずもない、呪文はこれ以上短くすることもできないし、親から子へ、子から孫へと作業を分担しても儀式には歪みができるはずだ……!？」

多分、ステイルは自分に注意を向かせようとしてるんだろう
上条に視線を送り、次に俺に視線を送ってきた

とりあえず頷いておく

「意外に、気付かんものだな」

お前も、俺達の考えに気付いてねえじゃねえか馬鹿

「100や200の年月では儀式を完成できない・・・確かに1人で行えばな、親から子へ、子から孫へと作業を分担すれば儀式が歪む・・・道理だが、何も一子相伝にする必要はあるまい」

「・・・なんだと？」

えつとそれっていつぱいの人で呪文を唱えるってこと？

「グレゴリオの聖歌隊だよ、2000人も人間を直接操って呪文を唱えさせれば作業の速度は単純に2000倍・・・仮に400年かかる儀式だとしてもこれなら僅か70日で完成させられるもん」
インデックスが言った

俺の考えは全てが間違ってたわけじゃなかったんだな、かすってたただけだ

「実際には、呪文と呪文をぶつけることで更に相乗効果を狙ったがな、わずか120倍程度の追加速度では成功とは言いがたい」

「・・・って俺意識飛びかけたよ！？そりゃ飛んだら楽だけでも！！
そういうわけにはいかないじゃないのよ！！」

無理矢理散り散りになる意識をかき集め、しっかりと離さないようにしてから辺りを見回す

体は動かし、アウレオルスとの距離もそう遠くはない

アウレオルスの攻撃を避ければ、避ければの話だが突撃することとできた

「120倍・・・わずか半日で済ませたのか！？だが、ここは異能者達の集まりのはずだ、グレゴリオの聖歌隊などを使えば回路の違う奴等は体を爆砕して果てるはずだ！！」

「だから、何故気付かんのだ、壊れたなら直せばいいだけの話だろう？」

・・・

上条は、俺と同じ瞬間にアウレオルスを睨みつける

「ああ、伝えていなかったか、あの生徒達、何も死んだのは今日が初めてではない」

俺は拳を握る

「そうだ、私とて自らの罪悪に気付かんほど愚かではない・・・ああそうだ、私は自ら失敗した、それでも確かに救いたいと思う人間が存在すると信じ続けて、その結末が、よもやこのようなものとは想像もつかなんだがな!!」

俺は握った拳に力を入れる

「テメエ!!」

アウレオルスは自らの首筋に鍼を突きたて、横に投げる

アウレオルスが言葉をつむぐ前に、俺達が立ち上がった

当然だが、アウレオルスは立ち上がった俺達を叩き潰そうと言葉を出そうとするだろう、だが上条には何か策があるようだった

言葉を出す前に、上条がポケットから携帯電話を取り出し、アウレオルスに投げつける

「・・・な？」

今、アウレオルスが戸惑った一瞬で、俺達は走り出す

「意味なき投石は地に落ちよ」

わずかなタイムロス、距離は半分、あと一撃、アウレオルスの攻撃を防ぐことができれば攻撃が可能

「この手には再び暗器銃、用途は射出、合図と共に準備を完遂せよ」でも、後一撃がどうしても間に合わない

アウレオルスは両手の暗器銃を離し、床に落とすとそれが合図となり再びアウレオルスの手には暗器銃が握られていた

あれ？やばくね？死んだよね、今度こそ確実に死んだ、と思う

アウレオルスが俺にとって、俺達にとって死の宣告になる言葉を発しようとした時

インケンティウス

「一魔女狩りの王!!」

ステイルが、叫んだ

ハッターだ、俺はすぐに分かった

「宙を舞え、ロンドンの神父」

ステイルの体が宙に浮かぶ、上条が立ち止まった

「立ち止まるな！！今なら攻撃を与えられる！！」

「そうだ！今の君ならアウレオルスを潰すことなど造作もないだろうに！！奴の弱点はあの鍼だ、医学のことなら君だってわか・・・」
ステイルは、上条を動かそうと思い切り叫んで、アウレオルスは、ステイルを刃物のような視線で睨みつけて

「内から弾けよ、ルーンの魔術師」

ぼん、こんな音は、コミカルなものにしか使わない音だろう

宣言どおり、ステイルの体は風船のようにふくらみ、直後に勢いよく爆発した

血と肉と骨と内臓と筋肉がばらばらに撒き散らされる

しかも、驚くべき事に血管はつながっていた、ステイル「マグヌスという男はあんな姿になっても生きていた

ゴトリ、という音が聞こえた

インデックスが気絶した音だ

喉まででかかった物を、俺は必死で押し戻す

気絶してえ・・・俺はまだへたれだし、死にたくない
情けねえよな、上条は必死で戦おうとしてるつてのに

・・・ああ、分かった、鍼つてのは不安みたいなものを取り除くものか？

「内容を変更、暗器銃による射撃を中止、刀身を持って外敵の排除の用意」

考えたら簡単なことだ、アイツがなんでも思い通りにできるつてんなら、そもそもインデックスを普通に助けたはずだ
でもそれを行おうとはせずに、吸血鬼を頼った

それにしても同じ事、自分で吸血鬼を作ればいいだろうに
それになにより、インデックスはなぜアウレオルスの方に振り向かない？

そうだ。アウレオルスの黄金錬成はアウレオルスの思った通りに現

アルスマグナ

実が歪んでしまう魔術

「ま、さか、そうか」

上条が気付く

上条はアウレオルスにとってまだ知らない人間

アウレオルスは姫神やステイルの存在は知っていて、自分には絶対勝てないと知っていた

でも上条は今日初めて会った人物

しかもその右手には異能の力なら打ち消せる右手がある

その右手に不安を感じないはずがないんだ

あとは任せた、と言いたいところなんだけどな

「そういう、ことだったのか」

「ふむ、貴様の過ぎた自信の源は、その得体の知れない右手だったな」

な、に？

俺は嫌な予感がした

この嫌な予感は当たってほしくない、そうなれば、勝機がなくなってしまう・・・

「ならば、まずはその右腕を切断、暗器銃、その刀身を旋回射出せよ」

「かみじょ・・・!!」

俺が叫び終わる前に、上条当麻の右腕は肩口から綺麗に切れていた
上条の右腕が回転しながら宙を舞う

信じられない速度で切り落とされた上条の右腕、いや、幻想殺し《イマジンブレイカー》

アウレオルスを相手に、唯一の勝機といえたであろう切り札
それが、切り落とされた

ちくしょう、これは、俺1人で戦えってか？

俺は演算を開始した

何か、コイツに勝てる何かをぶつけないと・・・
そう考えてた時

[illegible]

!

「かみ、じょう？」

右腕を切り落とされた俺のクラスメイト、上条当麻は、笑っていた。あまりにも予想外の出来事だったのか、アウレオルスが一步後ろに下がる

何を、考えてんだ？

まるで勝利を確信したかのような、そんな笑い

俺は数秒考えて、分かった

そう、
か

「暗器銃をこの手に、弾丸は魔弾、数は一つで十二分」

そうだ、考えればいい、こつち側なら考えれることだ

「用途は粉碎、単発中本来の目的に従い、獲物の頭蓋を砕くために射出せよ」

この命令通りにいくと、魔弾は上条の頭を貫く

人の動体視力では捉えれない速度で打ち出される魔弾は、何事もなく進んでいき

上条の頭を粉砕する、はずだった

「な・・・？」

魔弾は上条に当たらない

顔の横を通り抜け、壁に激突したただけだった

「先の手順を複製せよ、用途は乱射、10の暗器銃を一斉射撃せよ」
今度こそ、今度こそ当たるはず

だが上条には一発も当たらない、先ほどと同じ、壁に激突するだけで魔弾の威力は失われる

まだ気付かねえか馬鹿野郎

上条の右手は、いまだアウレオルスにとって何か得体の知れない力に変わらない

なら、上条が異常になれば？

右腕を切断させた先に、何かあると信じ込ませれば？

上条はまだ笑っている、錬金術師を見て、ただ笑う

恐ろしいな・・・味方である俺もそう思わされるほど、異常で、恐ろしかった

「く、あ、おのれ・・・我が黄金練成に逃げ道はなし、断頭の刃を無数に配置、速やかにその体を切断せよ！！」

上条の頭上に、巨大なギロチンの刃が生み出された

上条は避けようとしてもしない、ただ笑い、笑ったまま防ごうとはしない
ギロチンの刃は、上条の頭に直撃した

だが、直撃した瞬間無数のギロチンが粉碎した

上条は、まだ笑う

（俺は、やる事ねえ、かな）

演算を終了させ、もう発動させるだけの段階だった俺は、床に座り込む

何もやる必要がない、そう思ったからだ

死を免れることで低能力者にとっては無理な演算をしたんだ、力はもうない

上条は、一步一步、アウレオルスという錬金術師に確実に、近づいていく

アウレオルスが覚えるのは、ただ恐怖、という言葉だけだろう

俺も同じ、恐怖

上条は、アウレオルスの目の前にいた

「おい」

上条が言葉を発すると、アウレオルスは肩をビクリ、と震わせた

「テメエ、まさか俺の右腕をぶち切った程度で、俺の幻想殺しを潰せるとか思ってたんじゃないやねえだろうなア？」

瞬間

上条の右腕の切断部分、そこから、何かが飛び出してきた

巨大で、強大な、竜王の顎

ドラゴンストライク

俺はそれを見た瞬間、恐怖か、それとも脳の過量な演算による疲労かどちらか定かではないが、気を失った

目を覚ましたのは、病院の一室

その後、ステイルから一連の話を聞いた

アウレオルスは記憶を失い、整形した

ステイルが顔を焼いて、修復したらしい

俺はその話を聞いて、良い人！！と言って満面の笑みを浮かべ、ステイルに抱きつこうとしたが、予想していたように避けられた君も同類か、という言葉をかけられ病室を出て行った

とまあこんな感じ、実は俺、何もしてないっていう

はあ・・・死に行ったようなモンじゃねえか
でもそんなことはなかった

「君は、相手が強ければ強いほど、能力が強化するようだね、なんとも不思議なタイプだ」

カエル顔の医者と言う

これだけでも収穫といえるだろう？まあ無能力者相手だと、無能力程度の力しか使えないが

「尤も、強い力を使ったところで脳にかかる演算の負担は強ければ強いほど負担も大きくなる、今回の場合は特別だね、まるで一撃一撃が死の危険に晒されるようなもの・・・一体何をしたんだい？」

「さあ・・・ですけど、レベルを上げるとは可能ですよね？」

「ああ、可能だよ、僕としては戦う度にここに運ばれてきては呆れてしまうし、レベルを上げて演算の負担をなくす方が有難いんだけどね？演算を補う装置を作ろうかとも思ったけどどうも君には邪魔になるみたいだ」

「気まぐれ、ですかね？」

「そうだね、まるで能力が意志を持っているとしか思えないけど、違うんだ、君の能力が勝手に演算装置に働いて、なんでもかんでも分解してしまつて演算装置の効力をなくすどころか脳に無駄な負担

がかかってしまっただよ」

なんだその無駄な力、嬉しくない

「といっても普段の君は全然普通に過ごせるよ、有害なものには反応するみたいだね」

「詳しく言ったら強い人物じゃなくて、強い力に反応する・・・つまり反射神経みたいな要領で？」

「相手の強さが分かっていたら高度な演算が行える、というわけだよ」

ふむ、つまり上条を相手にする場合無能力者というレッテルをはられているにもかかわらず、異常な右手を持っているので俺の能力もそれに合わせて強くなる、と？

「でも相手に合わせて強くなるわけではないよ、高度な演算はそれに設定するみたいだけど、それ以上に無理な演算を行えば相手を超えることができるんだ」

結構強い

「けどそれを何度も行えば脳の方が持たないから意識をなくしてしまっただろうね」

扱いにくい、俺なんでこんな能力になっちゃったのかな・・・

「というわけで、なるべく戦いは避けるように、といったところだね」

それだけ言っつて、カエル顔の医者は病室から出て行った

それに変わるように上条とインデックスが病室に入ってきた

ま、すっきり解決、とはいかないけど、気分は少し晴れたかな

何か俺、いらなかった気がする（後書き）

夏野、いらなかったような気がしますけど、そうではないんですね
どうもすねえくです

吸血殺し編はなんとも適当な感じで終わってしまいました、一方
通行編はちゃんとするつもりです、つもりですがね

さてどんどん明確になってきた夏野の能力、というより特性
不思議すぎて口を開いてぽかーんとするしかないんですが、それは
置いて

予告しておく、一方通行編にはあの懐かしいとも言いますが、
あの人が登場します

前作を見ないと分からないんですが、とりあえず登場します

それとオリジナルストーリーも考え中です

もしも提供してくださる方がいれば、感想などで言ってくださいと、
幸いです

できるだけ自分で考えますが

ではここらへんで私はおやすみさせていただきます

次話の投稿は明日か明後日には行うと思います、それでは

8月20日全ては自販機から！

8月20日

上条と俺はとりあえず暇だし宿題すんのもなんだから散歩とか行こうぜ！ということになり

暑いし、ジュースでも買うかー！ということで路上に立つ自販機に上条は2千円札を滑り込ませたわけなのだが

・・・何の反応も見せない自販機が、俺達の前にあるいや、ちよつと待ってくれ

うん、まあ2千円札なんて珍しいことは百も承知んだけどそれにしたって2千円

無能力者で奨学金も高くない上条にとっては痛い出費どころの騒ぎじゃない

上条は連続でお釣りのレバーをがちやがちやさせ不幸だ、と心の中で叫んだに違いない

俺も分かる、お前に不幸を伝染されてよく分かっている

この前自動販売機に1000円を滑り込ませたところ作動しなくなつて怒りのあまりに分解してやるーと思っただが自分にそんな演算能力がなかったと思って断念

というわけで1000円の無駄遣いを余儀なくされたというわけだが・・・それにしても2000円とは悲惨すぎる

俺が上条の肩に手を置いて無言の慰めをしている時、後ろからカツツ、と革靴ローファーの足音が聞こえた

「ちよろつとー、自販機の前でポケットと突っ立ってんじゃないわよ、ジュース買わないならどくどく、こちとら一刻も早く水分補給しないとやってらんないんだから」

俺が手を置いていた上条の肩とは別の肩に、女の子の手が置かれぐいぐいと横に押した

当然俺も上条の肩を掴んでいたのでつられて横に移動するわけだが

上条にも青春の一環として、この出来事をとらえられるだろうか、
と考えたりしたが無理だ

今はとりあえず暑苦しいと思うだけだろう

そりゃそうだ、水分補給をしようとして自販機に2000円を突っ
込んだら自販機が反応を見せず、返ってこないんだから

そして言うまでもないだろうが、俺達を横に移動させたのは肩まで
ある茶色い髪に、半袖の白いブラウスにサマーセーター、灰色のプ
リーツスカートを身に纏った中学生くらいの女の子、名門常盤台の
お嬢様……いや、お嬢様というにも気が引ける、なぜなら女の子
の顔は満員電車から降りてきたサラリーマンのような表情をしてい
たからだ

何を隠そうこの少女、御坂美琴である

学園都市で7人しかいない超能力者《レベル5》の第3位であり、
レベルガン超電磁砲を異名とする通称ビリビリ

すまん、最後のは俺、主に上条の自己判断だ

そっぴや上条は記憶喪失だから御坂のことは覚えてないのか

哀れ御坂、名前を覚えられずに振り出しに戻ったぞ、すぐろくの最
後でスタートに戻るくらいの勢いだ

「……で、何だコイツ？」

「わったしつにはー、御坂美琴って名前があんのよ！いい加減覚え
ろこのド馬鹿！！」

御坂が怒鳴った瞬間、前髪からバチツと青白い火花が散った

嫌な予感——！！

と思つてた時には雷撃の槍が飛んできていた

「俺何にもしてねえよ！？」

俺は咄嗟に横に跳んで回避しようとしたが、そっぴや上条の右手が
あつたんだ

上条が右手を横薙ぎする

それだけで雷撃の槍ははじかれて、消えてしまった

ー幻想殺し《イメージブレイカー》

上条の右手に宿る、異能の力なら何でも打ち消してしまうという不思議な力

超能力だの魔術だのといった力は上条の右手に触れれば消えうせてしまう

そして、繰り返そう、上条は記憶喪失だ

きっと今頃御坂のことを殺人未遂犯の女子中学生程度にしか思っていない、程度というにも問題があるような気がするが気にしないでもいい

「何泣きそんな顔でこっち見てんのよ？とにかく用がないならどけどけ、私はこの自販機にメチャメチャ用があんのよ」

「あー」

んー、と教えた方がいいよな？金飲み込むって

そりゃ上条、ってか上条がいなけりゃ俺が殺されることになってたんだけど、とりあえず御坂は殺人未遂犯なわけであって、冷静に考えれば教える必要もないのだが、飲み込まれた瞬間怒りの矛先は間違いなく俺達に向けられるわけであって、今度は殺人「未遂」ではすまなくなるかもしれない

「その自販機な、どうもお金を呑み込むっばいぞ」

俺が言う前に上条が言った、まあ記憶喪失だと悟られないようにある程度馴れ馴れしくすればいいか

「知ってるわよ」

じゃあ何でお前は今自販機の前に立ってジュース買おうとしてんだよおばか

でも財布は取り出してないし、何かするつもりなのか？

・・・ここで俺はふと、御坂の能力について思い出した

「電撃使い《エレクトロマスター》」

それも最高位となれば、応用性は滅茶苦茶あるし、自販機だっと思うのままじゃないのか？

いや、まさか自販機にビリビリすることはないだろ、周りの目があるし

「呑み込まれるって分かって金入れんの？何かの寶錢箱か？これ」
「クソ馬鹿、裏技があんのよ、お金入れなくってもジューズが出てくる裏技がね」

嫌な予感だした、とてつもなく嫌な予感がした、もの凄く嫌な予感がした、何度でも繰り返そう、嫌な予感がした

ちよつと待て、裏技というくらいなら何度でも使ってるんだろうし、電撃はない、間違いない

もしそうだとしたら今すぐにもクラウチングスタートの準備をして走り去るところだが、どうやら電撃を放つ様子はない

御坂の次の言葉は、こうだった

「常盤台中学内伝、おばーちゃん式ナナメ45度からの打撃による故障機械再生法！」

ちえいさー！という掛け声とともに、御坂はスカートのまま自販機の側面に、上段蹴りを叩き込んでいた

自販機の中でガタゴト、という音が聞こえ、自販機の取り出し口にジューズが出現した

「ボロっちいからジューズを固定するバネが緩んでんのよねー、何のジューズが出てくるか選べないのが難点だけど・・・って 안타どうしたの？」

その問いに対して、俺達は口を揃えて何でもないです、と棒読みで答えた

ちなみにスカートの下は体操服の短パンだった

ちくしょう、無意識のうちに女の子の下半身部分に視線を預けていた俺が馬鹿だった！！数秒前の俺に言いたいよ！！馬鹿なことはすんな、後悔することになる、って！！俺の青春を返せ！！そして短パンはくなくコンチクショー！！

「ていうか常盤台中学内伝ってことは、常盤台のお嬢様は皆こんなことやってんのか」

「女子校なんてそんなもんよ、女の子に対して夢見んなよー」

おいそれ、お嬢様にあこがれてるクソ馬鹿の野郎の目の前で言っ

みろ、多分号泣する

少なくとも俺はショックを受けたね、同時にお嬢様に対してのイメージがとても複雑なものになった

「そうではなく、テメエらが寄つてたかつて毎日こんなこととしてから自販機が壊れちまつたんじゃないかねーかと問いかけたい！」

「いいじゃんよーなに怒ってんのよ、別にアンタに実害あるわけじゃないでしょ？」

それがさ、あつたんだよ、実害、数分前に2000円札呑み込まれたんだよ、この男

俺は上条の気持ちに伝染して泣きそうになった、同情する、凄く

「あん？そっぴやなんでアンタこの自販機が金食い虫だつて気づく」

・・・気付いたんだな、できれば気付いてやらないでほしかった

「・・・ひよつとして、呑まれた？」

やめたげて！それ以上は、ほんとに！！聞かないであげてー！！

「え、呑まれた？ホントに呑まれたの！？こら拳握つてぶるぶる震えてないで正直に答えなさい、アンタこの自販機にお金呑まれて呆然としてたつて訳！？」

「・・・答えたらどうしますか？」

「もちろんケータイの写真メール使つて間抜けの顔を世界に送信・・・つてジョーク！ジョーク！じりじりとすり足で間合い測るな恐いから！」

上条は盛大なため息をつく

そりゃそうだわ、2000円呑まれた拳句、裏技使われて今日の前でジュースを手にしてる御坂がいるんだから

俺がお前の立場なら間違ひなく号泣してるね、よく頑張ってるよ、お前

上条が肩を落として御坂に背を向けたので、俺もついていく

「ちよつと待ちなさいよアンタ、んで一体いくら呑みこまれた訳？」

「テメエそれ以上はやめとけ！！上条が精神崩壊してお前に襲い掛かるぞ！！もれなく俺もついてくるお得つきだが！！てか隣にいる

俺が一番危なっかしいぜ！！どうにかしろ御坂！お前のせいで上条のやさぐれ雰囲気マックスじゃねえか！！」

それに仮に御坂に2000円吞まれました、と言ったとしても慰めの言葉ではなく笑いが飛んでくるだろう

これ以上上条に精神的なダメージを喰らわせるともなれば、俺の身が危ない

「笑わない、約束する、ついでに言うなら吞まれたお金は取り返すわよ」

な、なんという親切スキル！！今御坂は上条にとって天使に見えていることだろう！！

・・・待てよ、そもそも御坂が蹴り入れまくってなきゃ自販機に金は呑みこまれなかったんじゃ・・・

どうやら上条はその事実には辿り着けないようだ、目をキラキラ輝かせている

「・・・にせんえん」

「二千円？んでそんなハンパな額突っ込んでんのよ？」

そう言ってから御坂は気付く

「待て、二千円？ひよつとして二千円札！？うわ見たい、超見たい！！まだ絶滅してなかったんだ二千円札！くつく、あははははは！そりゃ自販機だってバグるわよ、今時二千円札なんてコンビ二のレジん中にも入ってないってば！あつはつはつは、ひー！」

「おまつ、やめろ！！上条が頭抱えて嘔つきー！とか叫んで子供みたくなつてんじゃねえか！！」

「ほほう、ではその二千円札が出てくることを祈って・・・千円札二枚とか出てきたら承知しないわよこのポンコツ」

御坂は自販機に歩み寄って、投入口に手の平を押し当てる

「けどお前、どうやって自販機から金を取り出すんだ？」

「どうやってって」

御坂はきょとんとして

「こっやって」

瞬間、御坂の手の平から雷じみた青い火花が飛び出て自販機に直撃した

俺と上条はいつの間にか、バスの停留所のベンチに座っていた

いつの間にか空は夕焼けに染まっていた

「夕の取り分でしょ？」

「……何かこのジューズを受け取った瞬間に傍観者から共犯者へ成長進化しそうで恐い上条さんですが、っていうかポイポイ投げんな！……って熱ッ！！何でホットおしるこが混じってんだ！？」

「いやお前等！！」ってか主に上条！ホットおしるこを俺に投げつけんじゃねえ！！熱いのは今身をもって体験したから！！熱ッ！！熱

俺は上条が熱いからと俺の方に投げつけたホットおしるこを両手で
お手玉のように投げながら、叫んだ

にはわからないのかと問い詰めた」

「聞け、お前等！……ただでさえクソ暑い日にこんなクソ熱いモンを
持たされてる俺の気持ちになってみる！……そうだ、そうだろう？ 普

「置きよ」

なっ たな

「大っ 体さー、このジューズ一本にしてもそうだけど、アンタってば逃げ腰すぎんのよ、なんつーかホントは強いくせに自分は弱いと思ひ込んでバ力を見るって感じ？そーゆーの見てると一言モノ申したくなる美琴さんのよねー」

「・・・ 思いつきり外れなコトいつてる奴に限って、妙に偉そうなのは何なんだろうな？」

「なにおう？」

おい御坂、気付いてないかもしれんがお前の今の顔、タチの悪い酔っ払いみたいになっ てんぞ

「・・・ んなに間違っ たこと言っ てないと思っ っただけで、弱い奴がびくびくしながら生きるってのはアリだし強い奴が威張っ て生きるのも道理だと思っ わよ、だけどアンタは違っ っでしょ？この学園都市でも7人しかない超能力者《レベル5》、その1人を軽々となじ伏せる力を持ちながら、一体どうして街のゴロツキだの首輪の外れたチワワだのに追いかけて街中を逃げ回っ てんのよ？」

いやいや、それは上条の右手は異能の力以外に対しては全く意味をもちあさない代物でして、もちあすものといえは不幸の二文字くらいしか

「アンタはこの超電磁砲^{レールガン}の御坂美琴を打ち負かしたことをもっ と誇示すべきなのよ、そうでなければアンタが打ち負かしたこの私に申し訳が立たない、だっ てそうでしょ？これから私は一生こう思われるのよ、あの御坂美琴は、あんな街のゴロツキや、首輪の外れたチワワに追い回されるような男に負けたのか、っ てねアンタはこの私に勝利した、ならば最低限、勝者としての責任は取っ てもらわないと困るのねん、この私が、学園都市でも7人しか存在しないこの超能力者《レベル5》の1人が私はこんな男に負けたんだぞっ て胸を張っ て正々堂々と宣言できる程度にはね」

「何だそりゃ？江戸時代のブシドー精神じゃねーんだから・・・」
よし、分かった、上条が何で今悩んでるかよく分かった

さすが年頃の男の子、責任って部分に敏感なので、でも違うんだ上条、文字通りお前は御坂に勝ったから正々堂々と強くあつとけつてことだよ、分かる？ 分からないよね、いまだに俺と一緒に夜の街でゴロツキと一緒に鬼ごっこしてんだから、鬼が最初から10人以上の理不尽な鬼ごっこだけど

אולי, ולמה יש לי וליוליוס יש לי וליוליוס

「ちよつと、何智恵熱出してんのよ？しつかしアンタもむかつくわよね、あれどこの少年漫画から引つ張つてきたわけ？」

上条はいまだ頭を抱えてうなっている

「自分からは決して殴らず、相手に散々殴らせておいて全弾完璧にガードする、なんて手法、キザったらしくてム力つくくせに確かに効果があるってんだから許せないわ」

「俺はガードするにも数秒で意識がブラックアウトしたかな」

俺は特訓のビリビリを思い出して、思わず苦笑した

すると上条が御坂の顔を見て、急に自信に満ち溢れた表情になった。後ろから見ても分かるぞ、上条、なんて分かりやすい奴なんだ。

「なんか、自信を持ったら持ったで嫌な奴なのよねほれ、もういーからジューズお飲み、美琴センセー直々のプレゼントだなんてウチの後輩だったら卒倒してるのよん」

「卒倒だあ？こんな食品衛生法ぎりぎりの缶ジュース貰って喜ぶやつがいるかよ、大体少女漫画じゃねーんだから女子校でレンアイなんざありえねーだろ」

「……いや、少女漫画程度なら可愛らしいんだけどね」

御坂は目をそらした、ふむ、何か色々あるんだな、聞きたくない気もするけど

「色々あるんですよーいろいろ、むしろどろどろ？私が常盤台ん中でなんて呼ばれてるか教えてあげよっか？引いちゃうわよーん」

どろどろってなんだどろどろって、誰も昼ドラ的展開は求めてねえぞ、全人類が求めてたとしても俺は絶対求めねえ

御坂は力なく笑っていたが

「お姉様？」

どろっどろのどろっどろ！

おね、おねおねおねおねえさまっ！？お姉様とな！？

俺は声がしたほうに全力で振り返ると御坂と同じ制服を着た中学1年生くらいの女の子が立っていた

茶色い髪をツインテールにしたその女の子は、胸の前で両手を組んで目をキラキラさせている

「まあお姉様、まあまあお姉様！補習なんて似合わない真似をしていると思っただけこのための口実だったんですのね！」

いや、ちよつと待て、これはつつこむべきかつつこまざるべきかでも御坂からつつこみ禁止、というオーラが出ているので黙ることにする

「ええつと念のために聞くけどこのためとはどのためをいつているのかしら？」

「決まっています、その殿方等と密会するためでしょう？」

どっちが本命なのでしょう？と呟く少女を目にして、俺は上条を推薦した

ふつ、俺と御坂は夜中に特訓をするだけの関係だ、それに比べて上条と御坂は顔をあわせる度に追いかけてこをしてくるんだぜ？追いかけてこの前に「死の」をつけてもいいが、ちなみに俺の場合も特訓の前に「死の」をつけてもいいが
さて、どっちが友好的といえるだろうか？

・・・ん？友好的という言葉すら見当たらな気のは気のせいだろうか俺は握手を求めてくる少女に対し、軽く握り返すと

「初めまして殿方さん、私お姉様の露払いをしている白井黒子と言いますの」

「俺は夏野太陽、ちなみにお前の言動から察するものには恋愛の匂いを感じたんだが、断じて俺は御坂とそういう関係じゃないぞ？俺の隣に座ってるツンツン頭の馬鹿を推薦するね、俺は」

「へ？」

白井は上条と握手をして、俺と同じ自己紹介をして

「ちなみに、この程度でドギマギしているようでは浮気性の危険性
がありましてよ？」

上条に限ってそんなことないと思うけど

なんて思ってたなら御坂がゆらりと立ち上がり

「あー、んー、たー、はー、このヘンテコが私の彼氏に見えんのか
ー！！」

上条への侮辱の言葉とともに、雷撃の槍が放たれる

白井は上条の手を離すと何の前触れもなく姿が虚空へと消える

「って矛先は俺か！？」

なぜか俺の方に向かってきた雷撃の槍を瞬時に分解する

そして分解した雷撃の一部が上条の方へといき、不幸だっ！？とい
う言葉とともに雷撃は消え去った

「ちっ、空間移動テレポートなんぞ使いやがって、変なウワサ流したら承知し
ないわよちくしょう！」

御坂は何もない空に向かってバンバン雷撃を撃つ

ちよっと待て、落ち着け、落ち着けてば！！

とか言って近づいていけば間違いなく雷撃の餌食となるのでやめて
おく

演算機能も少し使っちゃったし

学園都市の第3位の電撃姫サマに注目が集まるなか、どうやって落
ち着かせようか頭を悩ませていたところ

「お姉様？」

またかよ、またなの、またなんですか！？と一瞬で振り返ると
ベンチの後ろに、もう1人御坂美琴が立っていた

ややこしい、実にややこしい

そこに立っていたのは、御坂美琴で間違いないはずだ

肩まである茶色い髪に白い半袖のブラウスとサマーセーターとプリーツスカート

背格好から服装や小物に至るまで何もかもが完璧な御坂美琴がそこにはいた

あれ？でもさ・・・

今上条の隣に座ってるのって誰だっけ？

肩まである茶色い髪に白い半袖のブラウスとサマーセーターとプリーツスカート

間違いない、そこに座っているのも御坂美琴だ

違うといえば、座っていない御坂はおでこの辺りに水泳ゴーグルのように暗視ゴーグルらしきものをかけている

後は目、だろうか

感情の色は一切見せずただ目に映ったものをひたすら追いかけているような、そんな感じ

・・・ってかどういことだろうか？

いやまて、整理しよう、ここで分かる事実

は御坂美琴が2人いるってことだけだ

「・・・って、え？増えてる？御坂二号！」

さすがに、上条に落ち着けっつーのは無理な話だろう

だって自分の隣と後ろに同じ奴がいるんだぜ？当たり前だろ

実際俺も滅茶苦茶びっくりしてるし

俺がどのタイミングで話かければいいのかなーと悩んでいたところ、

上条が後ろを振り返ったまま

「どちらさま？」

と聞いた

後ろに立つ少女は首を動かさず目だけで上条を見た

どちらさま？というのは返ってくる答えがもう決まってるようなもんだが

「妹です、とミサカは間髪いれずに答えました」

変な口調だなあオイ！と叫び、つつこみたくなったがやめておいたまあ、な、口調のことを言われたら傷つくんじゃないか？

それに姉とのキャラ分けでわざとそんな口調にしているかもしれないし「けど御坂ナントカで一人称はミサカなの？御坂ミサカじゃねーんだからさ、そこは普通名前の方を使うモンじゃねーのか、家ん中でも呼び名がミサカじゃ混乱しない？」

「ミサカの名前はミサカですが、とミサカは即答します」

どうでもいいけど、さっきから会話に御坂だとかミサカだとか御坂ミサカが多すぎじゃね？

やばい、俺何言ってるかわかんなくなってきた

さて俺はどうすればいい？まさか本当に御坂ミサカなわけじゃあるまいし、そこらへんは事情があると受け取っておくけど

どうすりゃいいんだろ、しょうがないからお姉様に頼ってみますかね俺は上条の隣に座る御坂の顔を見たが御坂はなぜか黙り込んで妹さんを睨んでいる

「そ、そっか妹か、けど似てんなー身長体重まで同じレベルじゃねーのか？」

「遺伝子レベルで同質ですから、とミサカは答えます、次いで、女性に向かって体重の話題を振るのは礼儀知らずだと心の中で呟きました」

コイツ絶対隠し事とかできないタイプだろ

心の中で呟きましたっていつて、その心の中での呟きを思いつきり口に出してる奴を俺は始めてみたよ

それは一個性として受け取っておくしかないんだろうけど

「遺伝子レベルってことは双子ちゃんなのねー、ふーん、一卵性双生児ってのはじめて見るけど、ここまで似るモンなんだなー、んで、その双子ちゃんがなんの用事？姉ちゃんと帰んの？」

いやはや、上条は実に馴れ馴れしい、そんなスキル私にはございませんことよ

「馴れ馴れしい人だなこの軽薄野郎、という本音を呑みこんでミサ力は質問に応じます、ミサ力を中心とする半径600m以内の領域にて、ミサ力と同等の力を確認したため気になって様子を見にきたのですが・・・」

一卵性双生児なら同じ能力を発現するのもおかしくないか、と俺は勝手にうんうん頷きながら納得する

「・・・現場には壊れた自販機、そして大量のジュースを持つあなた達、まさかお姉様が窃盗の片棒を担ぐとは思っていなかった、とミサ力は舌打ちします」

俺が持つてるのは滅茶苦茶熱いホットおしるこだけだが、ちくしゅう、まだ手が熱を持ってやがる

「一体いかなる方法でお姉様を懐柔したのですか、とミサ力は念のために事情聴取してみます」

え、俺電撃放たれた瞬間クラウチングスタートでその場からこの場まで走ってきたただぞ？

そりや怪しいか怪しくないか、って街にいる人10人に聞いたら間違はなく10人が怪しいと即答できるほど怪しいんだが、実行犯は俺じゃねえ、そうだ、俺はホットおしるこを渡されたただ

・・・受け取った時点で共犯じゃね？そうだ！！上条が投げつけてそれがもつたいないからキャッチしてあげただけなんだ！！

「おい、主犯はコイツ1人で俺達は傍観者だぞ」

見てねえで止めるよ！？俺を傍観者リストに登録すんじゃない！！嬉しくねえわ馬鹿！！

「虚偽の発言は犯罪に当たります、とミサ力は答えます、対象に電子をぶつけ、その反射率から自販機表面を計測した結果、最も新しく付着した指紋はあなたのものであることが判明しました、とミサ力は動かぬ証拠を突きつけます」

「ウソっ！？んなことまで分かんの電撃使いつて！？」

「ウソです、とミサカは正直に答えます」

・・・ウソかい

いやコイツすげえわ、この双子ちゃん相手にこんなに会話を続けるなんて、褒め称えてやりたいね

俺なんか心の中でつつこみしてるだけだもん、口に出していいなら今すぐ叫ぶぞ？

つかなんでお姉様は喋らないの？ずっと黙ってるなんてキャラじゃないだろうに

俺がお姉様の方を向くと

「アンタ、一体どうしてこんなところでブラブラしてんのよー！」
うわびつくりした！

声をだしてびつくりしなかった俺を褒めたいね、今ベンチからずり落ちてるけど

やっぱり情けない、叫んだ瞬間びびってベンチからずり落ちるってどうよ、男として

まあ私は女だからいいのようっふん的な展開は想像して自分でビール袋5袋分くらい吐きそうになったからやめておくが

そんなことをしたら俺を取り巻く環境が滅茶苦茶変わるだろう、いや変わらなければ逆に周りの奴と距離をとるね、俺は

「何かと問われれば、研修中です、とミサカは簡潔に答えます」
「けん、」

お姉様は背中を打たれたように息を詰まらせて双子ちゃんから目を逸らした、何かブツブツ言ってるけど気にしちゃいけないよね、俺は今いけないことをしてるんだだけ

「研修中って、妹さんは風紀委員にでも入ったのか？」
ジャッジメント
ふむ、風紀委員ね

学生からすると研修中って聞いたら速攻で風紀委員を思い浮かべるんだだけ

研修中ってなら腕章はしてないのな、別にどっちでもいいけどお姉様は両手を顔の前でパン！と叩いた、俺がびつくりしたのは内

緒、言っちゃ駄目

ジャッジメント

「あ、あー、風紀委員？あーあーそれよそれ、そーゆーことだからこーゆーことになっていろいろ大変でねー、いろいろ、むしろぼろぼろ？」

スマン、もう少し情報の提供を頼む、俺じゃ理解できん、それを理解できるのは人並みはずれた馬鹿くらいだ

おい誰だ、今「じゃあお前になら理解できんじゃん」とか思ったクソ馬鹿は、今すぐ謝れ

「おい、なんだかいきなりオレオレ詐欺並に情報量が減ってねーかお前のトーク」

「へ、減ってないわよ、ちゃんとくつきりはつきりぼつきり話してるわよ」

ぼつきりってどういうこと？

「色々積もる話があるから、色々、おい妹、ちよろつとこつちきてみよつかー？」

「は？いえ、ミサカにもスケジュールはあります、と」

「いいから、きなさい」

・・・何だってんだこの妙な予感ってのは

まあさ、俺の直感はあるてにならないつつーのが本音なんだけど、嫌な予感は当たるつつーかなんつか

明らかにおかしいんだよな、お姉様の態度が

俺達と接してる時は馬鹿みてーに騒いでるだけなのに、今は滅茶苦茶怖いものすら感じた

嫌な予感って、これだけありや誰でもするモンだよな？

え？しない？馬鹿言っちゃいけねーよ君

でもさ、人の家庭事情に首つつこむわけにはいかないのかな？

「複雑な・・・」

と、上条が呟いたので

「・・・ご家庭、なのかなあ？」

俺達はいっぱいあるジュースを抱えて、寮に向かっていた
そして帰路についていたところ上条の目の前にテニスポールがあった
どうやら気付いたらしく、ふと足を止め、横に移動したが
風が吹いた

テニスポールはタイミングを見計らったかのように上条の足元に転
がり、ふんずけ転倒

俺が巻き込まれる体質でなければ今頃上条を見下ろして哀れみの目
で見ていたのだろうが、それは叶わない

なぜなら、上条が俺の方に倒れてきて2人仲良く転倒してしまった
からだ

いやね、うん、まあ分かったよ大体こーなるってことぐらい
でもさ

何で俺の顔面にあるうことがホットおしるこがあんのよ？

「あつちいいいいいいいいいいいいいああああああああああ
ああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

街中であろうが、関係ない、熱い、今猛烈に熱い、そして暑い
ただでさえクソ暑い中なんでホットおしるこみてえな熱いモンを顔
面に密着させなきゃなねーんだよ！

しかも＋上条のおまけつき！いやはやお買い得！でもいらねえ！！
断じていらん！！死ね！もう死ね！

上条がようやく立ち上がり「悪い！すぐどこから！ついでにそれや
るよ！妙にお前に懐いてるし！」というとジュースを拾い始めた
いやね、俺もこんなモンに懐かれたくねーわ、どうせなら可愛い女
の子に懐かれない、素直モードの御坂とか可愛かったりしない？

あいつも黙ってたら可愛いんだけどなー

そう思いながらジュースを拾い集めて、上条の方を見ると

そこには御坂美琴が立っていた

あの人登場

うん、泣いたよ、ホットおしるこ熱いね

御坂美琴、というのは訂正させてほしい、よく見たら手に暗視ゴーグルをぶら下げていた

双子ちゃんの方ね、納得

「お、前・・・あれ？さっき妹連れてどっかいかなかったっけ？もつとジューズが欲しいんなら二、三本くらいならやるけど」

上条、上条君、その子は御坂美琴じゃないのよ、双子ちゃんの方なのよ、気付きなさいよこの馬鹿！！

上条は視線を彷徨わせ、ふと双子ちゃんの手に移す
そうそう、それでいいの

「あーなんだ、妹の方が、お前本当に美琴に似てるのな」

「・・・美琴、ですか、とミサカは問い返します、ああ、お姉様のことですか」

俺は内心上条が御坂のことを下の名前で呼んだことに驚いた

まあ仕方ないよな、双子ちゃんと見分けつけないといけないもの

「つかそのゴツツイ軍用ゴーグルは何なんだ？」

俺は手にぶら下げてあるゴーグルを指指して言う

いや、なんだ、気になるじゃん？単なる見分けのつけ方でつけてる
とも思えないし

双子ちゃんは落ちてるジューズを拾いながら

「ミサカはお姉様と異なり電子線や磁力線の流れを目で追う^{スキル}才能がないので、それらを視覚化する器具^{デバイス}が必要なのです、とミサカは懇切丁寧に説明しました」

敬語だったら何でも丁寧になると思ふなよばか

お前の場合絶対丁寧になることはねえよ、何故なら心の中のことを正直に言っちゃうからだ

そんなに毒舌吐いて丁寧なんて俺は言わせねえ

「気温と湿度が高かったので装備を外していましたが、必要性を感じるのならば装着しましょう、とミサカは提案します」

ふとジューズを拾うのをやめ、片手でゴーグルをおでこに引っ掛けるこれだとお姉様との区別がつかない

「ん、あれ？けどお前、さっき姉貴に連れていかれなかったっけ？」

「ミサカはあちらから来ただけです、と指差します」

指を指した方向は、見当違いの方向だった

あれ？まさか三つ子ちゃんでした！的な展開はないだろうし、あつてほしくない

めずらしすぎだろ

「それよりも散らばったジューズはどうするのですか、とミサカは問います、このままだと道路交通法に抵触して15万円以下の罰金を受ける可能性があります、と付け加えます」

15万とか貧乏学生にそんな額求めんなよ

そんな大金払ったら死ぬっつーの、ってか俺も巻き込まれんの？ジューズ持つてるし

はは、ないわな、ない、ないよ！！・・・ない、はず

・・・ないとも言切れないのでジューズを黙々と拾い続ける

いやはや、なんと言ってもホットおしるこが熱いね！むしろもう清々しいよ

ねえ、いる？これ、いる？え、いらない？そうかいらないか

途中で軽トラックがクラクションを鳴らしてきたので、うつせえ！
！こっちは15万払うか払わないかの瀬戸際なんじゃクソボケ！！
分かったらさっさと爆発して砕け散れ！！トラックだけ！！

うん、流石に俺も人は殺さないよ？多分

あーそうだそうだ、失礼なことを思ったお詫びに、ホットおしるこをやるっ、え、いらない？そうか

ち、ちくしょう、なんだって俺はこの炎天下の中クソ熱いモンをもたねえといけねえんだ

俺はホットおしるこを愛した覚えはねえぞ！！多分！！

いやねえよ、絶対

そろそろ熱さに慣れてきた頃、全て拾い終わり双子ちゃんが寮まで運んできてくれることになった

あれ？俺等男だよ？男2人いるのに女の子に荷物持ちさせるってどうよ

情けないよな・・・俺にプライドなんてものがあつたらすぐに上条に幻想をぶち殺してもらうけど

幸いこつから寮まで5分だからいいんだけど、それまでに上条の不幸伝染病発病しねえよな

しないことを願おう

いやさ、俺ホットおしるこんなて存在忘れるほど熱さになれたんだけど

どうしてくれんの！？俺感覚おかしくなっちゃった！？んなわけない、んなわけない

無事寮について上条の隣人、土御門元春の義妹、土御門舞夏と出会い、抹茶ミルクという緑茶に分類されないであろう代物を渡すと、上条宅の前でインデックスと姫神が向かい合うようにしゃがみこんで三毛猫とじゃれていたが、めんどくさそうなので無視、いいよね、たまにはこんな日も

「じゃ、俺疲れたから寝るわ・・・精神的にも、体力的にも」

「上条さんはもう少し振り回されそうですが、まあありがとな、お礼にジュース何本かやるよ」

「ふつ、俺はホットおしるこだけでいいぜ」

俺は部屋に入って泣きながらホットおしるのを飲んだよ

でもさ、何か、妙においしかったんだ、苦労した後の一杯っていうのかな？

いや、最高、仕事最高、ホットおしるこ最高

もう飲まないが

爽やかな朝を向かえ、気分が晴れやかになったので散歩なんていう

炎天下の中でやることではないことを実行すると、いつの間にか路地裏に入っていて、不良に目をつけられ、絶賛逃亡中なのであったいやさあ！！何度も言うけどこんなことに青春削りたくねえよ！！青春返せコンチクショウ！！

こうしてる間にも上条は青春してるに違いない！俺と違った方面で！！なんと羨ましい！！そして死ぬ、俺は上条に彼女ができることがあれば精一杯祝ってから縁を切る！！

おかしくねえよな！？多分世間一般ではおかしいんだけどさあ！！でも不良に追いかけられながらだったらおかしくなるよ！！

「ちくしょおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

「さつさと金だせやああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「出せるか馬鹿！！」

俺は演算がほとんど必要がない砂埃を巻き上げる

不良の視界を奪い、そこから一気に逃走

情けねえ、なんだって俺は炎天下の真昼間に不良とおいかけてこしねえといけねえんだ

俺の青春返せ！！不良ども！！

ってか不良に追いかけられるのって上条の特権だろ！？俺に譲ってんじゃねえよ！！嬉しくねえ！！

ちくしょう上条、殺してやる！！殺してやる！！理不尽な気もするけど殺してやる！！

俺は一旦止まって後ろを振り向いた

「まだきてる！？」

再び逃走開始、悪かったな！戦う力ないんだよ！！

俺は連続、連続、連続で砂埃を巻き上げる

ハッハッハッハ！！俺の能力にはこういう使い方もあるのだよこういう使い方しかできないのは内緒！！レベル低いのよ！！うるわいわね！！

全力疾走した後、いつの間にか辺りは暗くなっていた

結局、俺は一日の青春を不良との追いかけっこに使っていたということだ

・・・悲しいってレベルじゃねえぞ

俺が暗くなつた空を見上げて感傷にひたっていると

「久しぶりー！夏野くん！」

な・・・ッ!?

俺は速攻で後ろを振りむいた

そこには藤色の髪をポニーテールにしている整った顔立ちをしている少女はまだどこかに幼さがある

歳も同じくらいで、可愛い女の子なのだが

俺はテンションが上がらない

なぜなら、こいつは

「何？この世界にイレギュラーが混じってちゃ駄目？」

そいつの名は、六道望

あの人登場（後書き）

すねえくです

死にたい、と唐突に思いました

なんと一回書いた小説がサブタイトルを入力していなくてエラーがでてやり直し

そんな僕でした

俺、こんなんだっけ

六道望

俺が前の世界で会った人物だ

いや、人物ともよべるかも問題な気がするが

とりあえず分かりやすく馬鹿みたいに言うとか神様の使いみたいな感じだ

俺が転生者だということを知り、それを見て面白がってる変態さんである

「チツ、なんのようだ」

「いやーちよつとね」

望は笑いながら言ってくる、ちくしょう可愛いじゃねえか・・・

望が次に口を開いた時には、俺は驚愕したさ

「お友達がピンチだよ」

なんだって、俺はまた走ってんのかね

まあ理由は簡単なんだけど・・・

レイディオノイズ
シスターズ
量産異能力者妹達の運用における超能力者、アクセラレータ一方通行の絶対能力への進化法

望の口が開かれた時に言われた言葉は確かにそうだった

俺が首を傾げて疑問に思いつつも説明は続けられた

まだ見知らぬ絶対能力《レベル6》へと辿り着けるのは一名、アクセラレータ一方通行というらしい

アクセラレータ一方通行は事実上、学園都市最強の超能力者、一樹形図ツリーダイアグラムの設計者によると、その素体を用いれば、通常カリキュラムの時間割を250年組み込むことで絶対能力へと辿り着くと算出された

流石に、これだけのことを言われて俺が覚えれるわけがないので今俺は手にレポートを持ちながら走っている

そこから先の内容は

我々は250年法を保留とし、他の方法を探してみた

その結果、一樹形図ツリーダイアグラムの設計者は通常カリキュラムの時間割とは異なる方法を導き

出した。実戦における能力の使用が、成長を促すという点である。

念動能力テレキネシスや発火能力バイロキネシスの命中精度があがるという報告が多いが、我々はこれを逆手に取る

特定の戦場を用意し、シナリオ通りに戦闘を進めることで、実戦における成長の方向性をこちらで操る、というものだ

予測装置シュミレーター一樹形図ツリーダイアグラムの設計者を用いて演算した結果、128種類の戦場を用意し、超電磁砲レールガンを128回殺害することで一方通行は絶対能力へと進化シフトすることが判明した。だが、当然ながら同じ超能力者で

ある超電磁砲は128人も用意できない、そこで我々は同時期に進められていた超能力者量産計画シスターズ、妹達スベックに注目した。当然ながら、本

家の超電磁砲と量産型の妹達では性能が異なる、量産型の実力は、

大目に見積もって強能力者程度のものだろ。これを用いて一樹形

図ツリーダイアグラムの設計者に再演算させた結果、2万通りの戦場を用意し、2万人シスターズの妹達を用意することで、上記と同じ結果が得られることが判明し

た。

これだけが渡され、今度は今からこの場所へ行けば妹達シスターズを助けることができる、といわれた

あいつは何を考えてるんだ？そもそも俺がそれを信じるわけがない、
が

あいつの言う事なので、嘘じゃない場合がある

もし嘘じゃなかったら？俺は妹達シスターズを見殺しにすることになる

だが、一方通行と真正面から戦って勝てるはずがない

俺の能力が相手に合わせて上がるとしても、絶対に

俺の能力は超能力者程度にしか上がらないだろう

それで一方通行に勝てるのか？無理だな

能力については俺は知ってる、あらゆる方向ベクトルを操るという能力

例えば風とか、運動量とか、一方通行が人間に触れれば、その気になつたらぐちゃぐちゃになる

それに反射膜つつーのを張って、触れたモンをなんでもかんでも反射しちゃう

え？無理だろ、勝てねえよ

だから俺が取る行動は双子ちゃんを連れて即行逃げる！！

それも無理だろうと思うけど、戦うよりましだろ、うん、俺はどうせへたれだよ！！

でもさ、やつば見殺しにはできねえ、前の俺なら多分怯えていかなかっただろうな

なんたつてあの頃の俺は人類最強のへたれって言っても過言じゃないもん

でも知るか！！今の俺は違うんだ！！今こうして助けに行ってるじゃねえか！！

馬鹿だつーことだよ

「はぁ・・・はぁ・・・」

ついた

ここは西の外れの工業地帯、その一角の操車場だ

迷わず突入、ホント、俺って馬鹿じゃねえの？

次に俺が目にしたのは、砂利の上に転がった双子ちゃん・・・御坂妹と、それをやったかと思われる白い髪の少年、一方通行だった

「おい！！！！！！」

叫んだ、もう後戻りはできない

あーどうつすかなーやり残したことあんのによー

「・・・おい、この場合実験つてなアどうなっちまうんだ？」

やべえ、まじで怖い

「よし、やるぞ、今すぐやるぞ」

俺は両手で頬をパン！！と叩く

「一方通行！！今すぐ御坂妹から離れる！！ってか離れてくださいお願いします！！」

情けないだつて？うるせえ！！こいつを前にして正常でいられる人間なんかいねえよ！！

「あア？なんだテメエ、勝手にでてきてペラペラペラペラ、うつせエンだつての」

「ちよつとばつかフライング気味だけど問答無用！！こっちは余裕ねえ！！」

「ここは砂利、いける！！」

瞬間、辺りが砂埃で埋め尽くされる

人間の視界を奪うには充分だろう

「チッ、つまねエことしやがって・・・どオセ俺には攻撃なんか当たんねエのによオ」

・・・ふう

俺は今御坂妹を連れてコンテナの陰に隠れている

フツ、どうだ俺の早業！！アクセラレータ一方通行も気付かねえ速さ！！

ここは不良に感謝しとくか・・・さて、さっさと逃げ、

「俺、カクレンボ大好きなんだわ」

ばれてる

「ちつくしよおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

背を預けていたコンテナから離れる、なぜならドガン！！という音がしたからだ

コンテナは壊れ、中から小麦粉が出てきた

中身は小麦粉、か

今日は無風だし、能力は上がってる

いける！！

「隠れる時間貰うぜ！！」

俺は走りながら能力を使う

能力を使うと、俺達の背で爆発が起きた

これも単なる目暗まし、これはどうしたかというと

空気中に粉末が漂っていて、それに火がつくと酸素の燃焼速度が速くなって、そこら中にある空間が一個のでかい爆弾になる

粉塵爆発

運がよかったと思うしかないな

俺は瞬時に違うコンテナの陰に行つて、御坂妹をそこに寝かせる
・・・はあ、俺はとんでもねえ馬鹿者だよ

学園都市最強相手に戦おうと本気で思つてるんだからさ

御坂妹を抱えてたら死は免れないつて今分かつたしな

それに、俺の能力は今だ謎、賭けてみて面白いと思う

爆発によつて起きた煙が晴れると、俺の視界には一方通行がいた

アクセラレータ

「あれエ？カクレンボやめたのか？それともうちよつと隠れる時間が欲しいな言わねエよなア？俺は充分テメエに時間をやったんだしよ」

「悪いな、もつといい遊びを思いついたんだ・・・鬼ごっこ！！俺が一番大好きな遊びだ！！」

「・・・勿論、俺が鬼だよなア？」

「当然！！」

死の鬼ごっこなんて、いつぶりだろ

馬鹿じゃねえのか、俺

アクセラレータ

1人でそんなことを思いながら一方通行から逃走を開始する俺であつた

一方通行『アクセラレータ』

ひい　いいいいいいいい！！！！超こええ
ええええええええええ！！！！

何て言ってもられない、立ち止まればすぐ死亡なんていう状況だ
俺は逃げてる最中にコンテナをコツン、と指で叩く

するとコンテナが破壊され、小麦粉が出てきた

二回目だコンチクショウ！！このままだったら本気で捕まっちゃうわ！！

また巨大な爆発が起こる

その間に逃走開始、しようとしたが

「どこに行くんだ？」

後ろから、蹴りをいれられる

「がっ……はっ！！！」

無様に地面に転がる、痛い、純粋に痛いよ

「つつかまえた、さアて鬼ごっこは俺の勝ちだ、次は何して遊ぼうか？」

「決闘ごっこ、とかどうだ？」

「面白エ、でもこれは俺の虐殺ごっこっつうンだけどなア!!」

一方通行は足の裏で砂利を踏んだ

すると砂利が爆発した、爆発した砂利は、まるで至近距離から放たれたショットガンのように俺の体を打ち付ける

「ッ！！」

吹っ飛ばされた、あまりの衝撃に肺の中の空気が無理矢理吐きだされる

くっそ、どうにかして勝てねえのか！？

一方通行はどんどん俺に近づいてくる

あれ？俺死んだんじゃ・・・

まだだ！！まだ死んでねえぞ！！！！

膝に手を置いて、全身に力を入れて立ち上がる

「遅エ」

目の前に、アクセラレータ一方通行がいた

右拳が、眼前に迫る

「あぶねっ！！」

なんとか首を横に動かして避けて、そのまま横に移動する

それを追ってくるように手を伸ばしてくるが、それもらくらく避けれた

・・・あれ？コイツ全然弱くないか？

いや能力的には滅茶苦茶強いけど不良同士の喧嘩みたいなのは全然弱い

動きが素人並だし、動く標的を何の考えもなしに手で追っただけ、みたいな

そうだよな、今まで能力に頼ってきた奴が喧嘩の仕方なんて知ってるはずがねえ

「クソッ！！ちょこまかと逃げてンじゃねエぞ三下ア！！」

「うっせこっちは当たったら死ぬんだよ馬鹿！！」

アクセラレータ俺は一方通行の手を避ける

アクセラレータ素人同然の一方通行の攻撃を避けるなんて造作もない

勝てないけど

勝つにはあいつの張ってる反射の膜をどうにかしねえといけないさて、どうしたもんか・・・

駄目もとで、反射膜の分解なんてやってみるか？

でも反射膜はベクトルが外向きに向いてる感じのものだったような気がするし、できるかな・・・

「ええい！！迷ってられつか！！どうせこのままっだったら死ぬんだしな！！」

俺は右手で握り拳を作る

アクセラレータそのまま一方通行の顔面に右拳を叩き込む

「何考えてンだ？俺を殴れると思ってンじゃねエだろオナ・・・ッ

！？」

顔を、とらえた

アクセラレータ

一方通行は俺から見てとっても愉快的表情になると、そのまま後方に飛んでいった

・・・いつてえ！？滅茶苦茶痛い！！

どうやら完璧に反射は消せないらしい

骨、やつちまったか？まだいけるっばいけど

「お、面白エ、愉快に素敵に決まっちゃったぞ、お前はア！！」

「ははっ、俺の能力を見くびってんじゃねえぞ、何の対策もなしに第1位に喧嘩売ると思ってるのか？」

対策なかったんだけど、ここはかつこつけとこう

アクセラレータ

一方通行は眉をひそませ、怒りの満ち溢れた表情になると、再び突進してきた

見える！！

アクセラレータ

最小限の動きで一方通行の突進を避けて、今度は左手で腹に拳をたたきこむ

「ごっ・・・」

アクセラレータ

そのまま右手を振り上げ、くの字に折れ曲がった一方通行の後頭部に、右肘をたたきこむ

倒れると思ったが、空中で一回転して着地して、振り返る

そこに右足で腹に蹴りをいれる

アクセラレータ

一方通行は吹っ飛んで、どうベクトルを操作したか知らないけど安全に着地する

「チッ・・・なんなんだお前？どやって俺にダメージ与えてんだ？・・・喜べ、テメエが初めてかもしんねエぞ？この俺を死ぬかもしんねエってとこまで追い詰めた奴は」

「そりやどうも・・・光栄だな、本当に」

まさか俺が学園都市最強と渡り合えるなんて思ってなかった
完全に左手と右足の骨やつちまったけど

「テメエがどオいう原理で俺を殴れてるか知らねエが、俺に攻撃を

与えられるよオな奴が超能力者じゃねエはずがねエ、だがどオいうわけだか、俺はテメエの顔を知らねエンだよなア？」

「俺は低能力者だしな」

「つまんねエ嘔吐くんじゃねエ、大能力者ぐれエはあるはずだ」

「^{バンク}書庫にもちゃんと低能力者つてあるぞ？ちよつと特殊能力つきだけど」

ま、認めたくないわな、低能力者にやられてるなんて

「・・・ま、殺す前にどんな奴か知リたかつたんだけど、意味ねエな！！」

^{アクセラレータ}一方通行はまた突進してくる、全く、学習能力ねえのかよ

でも学園都市で一番の頭を持つ奴が、がむしやらに突進を繰り返すわけがねえ

必ず何かある、用心しとかないとな

右手で握り拳を作つて^{アクセラレータ}一方通行に向かつて拳を放つ

すると、目の前にいた^{アクセラレータ}一方通行が、消えた

一瞬の出来事に困惑していると、後ろから声が聞こえた

「後ろだつての！！」

^{アクセラレータ}俺の背中に一方通行の蹴りが突き刺さる、それとほぼ同時に俺の体が吹っ飛んだ

「かはっ・・・」

俺は数m先のコンテナに叩きつけられていた

全身に痛みが走る、気付くと俺の視界は暗い空で埋め尽くされていた

「ははっテメエは反射を消しきれてたわけじゃねエンだよなア？だとしたら骨の何本かはいつちまつてる、それに加えて俺のさっきの

攻撃でもオ立つことも難しくなってるはずだ」

^{アクセラレータ}俺は空から一方通行に視線を移す

「今だにお前の能力がどオいうモンか知らねエ、爆発起こしたり、

俺の反射を超えてきたり、滅茶苦茶愉快な能力つつウのは充分分かるんだけどよオ、今のテメエならこれは止めれんのか？」

^{アクセラレータ}一方通行が両手を広げて視線を頭上に移す、すると一方通行の頭上

に高電離^{フラスマ}気体が作り上げられていく

はっ、残念だったな、俺はそんなもんでもできて・・・

ガクッ、と体全体に重りがついたように下がる

なん、だ？これ・・・？

演算ができない？

どういう、ことだよ・・・

そこで俺はふと、カエル顔の医者^{ヒール}の言葉を思い出した

『強い力を使ったところで脳にかかる演算の負担は強ければ強いほど負担も大きくなる』

『僕としては戦う度にここに運ばれてきては呆れてしまっし、レベルを上げて演算の負担をなくす方が有難いだけだね？演算を補う装置を作ろうかとも思ったけどどうも君には邪魔になるみたいだ』
『君の能力が勝手に演算装置に働いて、なんでもかんでも分解してしまつて演算装置の効力をなくすどころか脳に無駄な負担がかつてしまっただよ』

『といっても普段の君は全然普通に過ごせるよ、有害なものには反応するみたいだね』

・・・つつーことは、俺が反射膜を有害なものと認識して、無駄な演算を行っていたと？

それで脳に負担がかかって、演算ができなくなった・・・

その前に粉塵爆発を二回起こしてたから余計だな

それに加えて一方通行^{アケセラレタ}の攻撃に、左手と右足の骨が折れてて・・・

こりゃ、本格的にやべーな

「さアて、お前はよく頑張ったよ、俺に何発も与えれたんだからなア、あの世で自慢してもいいインだぜ？」

ち、くしょう・・・

高電離^{フラスマ}気体^{ヒール}が俺の体に当たることを想像していたのだが、その想像は、いきなり現れたツンツン頭の少年によって打ち破られる

・・・やっぱ俺程度じゃ主人公^{ヒール}にはなれねえな

「遅えよ、主人公^{ヒール}」

「大丈夫か！？夏野！！」

上条当麻、正真正銘本物の主人公^{ヒーロー}だ

主人公へヒーロー

上条は一方通行の顔を殴り飛ばす
アクセラレータ

一方通行の体が少し吹き飛ぶと、背にあるコンテナの裏側まで跳んでいった

一旦逃げたか、体勢を立て直すにはいい方法だな

俺はふらふらと立ち上がって上条を見る

ところどころ焼け跡みたいなのがあつた、何かしてたのか？と聞く気にもなれない

「悪い、御坂妹を放っておけなかった」

どうやら俺が隠していた御坂妹に会つたらしい、へっ、なら心配ねえな

「なら、後は、あのクソ野郎を、ぶっ倒すだけ、だな」

途切れ途切れになりながらも、言葉をつないでいく

正直に言つと、意識が朦朧としている、痛みに加えて演算による脳の負担

だが、ここくらいは無理してもいいよな？

「後は俺に任せとけ、見たところボロボロじゃねえか」

「いや、俺も、行く」

上条は一度考えてから、決断する

俺は連れて行かないの一点張りだと思つてたが

「分かつた、でも無理すんなよ？」

「悪いな、無理、させてもらう」
アクセラレータ

俺は右足を引きずりながら一方通行の向かつたところに行こうとしたら、上条が肩をかしてくれた

はっ、これじゃ、戦うとか言つてられねえか
アクセラレータ

コンテナ群をぐりぬけた先に、一方通行はいた

おろせ、と上条に一言言つと、上条は俺を開放する

ちよつと立つのきついけど、まだ大丈夫か

「テメエ等・・・もオナソで俺に攻撃を当てれるかってことは聞かねエ、今はテメエ等をぶち殺すことだけ考える」

ま、俺は死んでただけだね、上条がこなかったら

上条が目を向けてくる行くぞ、という合図が、俺にはちゃんと伝わった

上条の右手もちゃんとあいつにはきいた

ならもう怖れることはない

右足を引きずりながら一方通行に向かって行く

上条はとつくに一方通行の近くまで走っていつている

右手を振りかぶり、殴ろうとした時

「上、条、上だー！」

叫べた、そうだ、一方通行は俺の時と同じように上に跳んで後ろから攻撃を仕掛けるつもりなんだ

上条は俺の叫びを聞いて反応できたのか、瞬時にしゃがむ

ここからでも一方通行の舌打ちが聞こえた

上条は一方通行に目を向けると、顔面に向かって殴りかかる

直撃、上条の右手による攻撃は一方通行の顎に直撃した

また空中で一回転、安全に着地する

「はあっ・・・はあっ・・・」

学園都市最強も、人間は人間だ、息も上がるだろう

すると、俺の頬に風の感触があつた

その瞬間、一方通行の口が歪み、恐ろしい笑顔を作り上げる

「くかき」

びくつ、と俺の体が震え上がる

何かする、俺にとって決定的な何かを

「くかきけこかきくけききこかきくこくけけこきくかくけけこかくけきかこけききくくききかきくこくくけくかくくこけくけくきききかかか——ッ——！」

一方通行が叫ぶと同時に、突風、いや烈風が巻き起こった

俺はいとも簡単に吹き飛ばされ、上条の体も宙を舞う

「はあっ・・・ッ、なア、さっきまでの威勢はどオしたンだ！？ほ
ら、もう一発かましてやっからかつこよく敗者復活戦でもしてみろ
っての！！」

「アハハハハハハハ アアア アアアアアアア！！！！！
！！！！！！・・・ッ あア？」

一方通行は何が起きた、と本気で思っているだろう

そうだ、俺の力は一方通行にとって未知の力、何ができるかも分からない

空気とかを操るとか、そういう部分に関してはほとんど一緒だとしてらら？

俺はぼろぼろの体で立ち上がろうとする

上条は一方通行のほぼ至近距離で烈風を受け、コンテナに頭をぶつけていた

俺に比べてダメージが相当大きいはずだ、なのに、まだ立ち上がる
ヒロイ
流石だ、主人公

なあ、俺はお前から見て主人公に見えるか？

上条は一方通行の力によって吹き飛ばされる

その後、殴られ、蹴られ、拳の果てに俺の方まで吹き飛ばされたが何度でも立ち上がる

まさ
に主
人公

情けねえよなあ……俺はまだ立ち上がれずにいる

この数分で上条も明らかにぼろぼろだ

それでも、立ち上がる

・ ・ ・ チツ、んなにかっこつけんじゃねえよ、テメエがそんなだったら

「思わず、俺もかっこつけたくなっちゃまうじゃねえか……!!」

無理な演算で脳がボロボロ、骨が数箇所折れて、体もボロボロそれがどうしたってんだ

俺だってかっこつけてえし、守りたい奴だっている

昔の俺なら到底吐けなかった台詞だな

「面白エよ、オマエ等

――」
アクセラレータ

今にも死にそうな俺の耳にも、一方通行の声が聞こえた

「最っ高に面白エぞ、オマエ等ア！！！」
アクセラレータ

一方通行は俺達を倒すべく、拳を握って突進してくる

砲弾じみた速度で

有難い、向こうからきてくれるならわざわざそっちに行く必要がないからだ

俺は絶対辿り着く前に倒れてた

アクセラレータ

俺は右手を握る、一方通行を倒すべく、右手を握る

アクセラレータ

そして、上条と共に、一方通行に向かっていく

アクセラレータ

上条は、一方通行が突き出していた右手を、払う

アクセラレータ

「「歯を食いしばれよ最弱」」

上条と、言葉が重なる

アクセラレータ

俺はしゃがんで、一方通行の腹に拳を放つ

アクセラレータ

「「俺の最強は、ちつとばっか響くぞ」」

瞬間

アクセラレータ

俺の右拳が一方通行の腹に突き刺さり、上条の右拳が顔面に突き刺さる

その後はどうなったか知らない

右手が折れる音と同時に、俺の意識は飛んでいった

「本当に君は無茶をするね」

「お許しくださいませ」

俺は目を覚ますと同時に、カエル顔の医者に頭を下げていた

俺が想像した以上に体はボロボロで、外の技術なら間違いなく死んでいただろうと言われるほどだった

そこは流石学園都市、カエル顔の医者とでも言うべきか

「今回は前回よりも脳の負担が大きいね、本当に何をしたんだい？」

「拳を交えました」

「学習しなさい」

俺は再び頭を下げた

「でも・・・」

俺は、口を開く

「俺は、戦わなかったら一生後悔してたと思います」

そうかね、とカエル顔の医者は呟いた

目を覚ましたら、訳が分からなかった

8月28日、天気クソみたいな晴れ、全く、日本の夏というのは容赦ない

そんな超晴れな天気で朝を迎えた俺はゆっくりと起き上がった目をゆつくりと開けていつて視界に入るのは、六畳一間の和室何か結構古い感じのところで、床はボロボロの畳張りで、天井は古めかしい四角い電灯カバーのついた蛍光灯、油っぽい汚れのついた押入れの襖に家のトイレにでも使われてそうな簡単な鍵のついた木のドア、エアコン代わりの扇風機はプラスチックのボディが黄色く変色していて、ちよつと鼻を動かすと潮の香りがしたん？学園都市じゃないよ？ここ

そもそも学園都市の中ですらないし、うんうん神奈川県某海岸、海の家わだつみの二階にある客室だ別の部屋には上条や、その両親、インデックスもいたはずだえ？場違い？うつせこの野郎

まあというわけでここは学園都市の外なわけなのだがそもそも学園都市の外に出るには結構苦労がいる外に出る許可を貰うには3枚の申請書にサインして、血液中に極小の機械を注入して、さらには保証人まで用意しなくてはならない・・・なんだけど

普通なら学生が申請書を書いて外に出してくださいとお願いするのだが、今回上条と俺は逆に先生から外いつてる馬鹿と有難いお言葉という名の命令を受けたのである、まともな夏休みだったろうか？間違いなくまともじゃないと断言できる自分がここにいない俺と上条は一週間ほど前に学園都市最強の超能力者を倒していた凄いだろ？褒めてもいいよ

そんなこと言つてふざけれる事じゃないのだがそれであつという間にその噂は広がり、俺達の地位は飛躍的に向上

したのだ！！

って思いたかつただけど、そうではなくてだな

そっかーあの無能力者と低能力者を倒せば学園都市最強の称号が貰えるんだー、という意見の元、腕に覚えのある街の不良さん達が大々的な人間狩りを始めてしまったのである

それで頭を抱えたのが学園都市のお偉い方で、無用な混乱を生まなようにどっか行ってきたまえクソバカ、といった感じである
ひどいのなんてもう慣れっこさ

そして何故上条の家族との対面を邪魔しにきたかと言うと（自分で思ってた悲しくなったのは内緒）

実は上条当麻はある理由から記憶を失っており、家族への対応も結構難しいと思われる

だから俺がちつと助け船を出してやろうというわけだ

どうせ俺の両親なんか気にせずにはらへらして暮らしてるさ

あーそうだ、俺は行く宛もなかったのよ！！今更悲しめないさ！！
っわけで俺は上条の両親と初対面で胸がドキドキワクワク、という気色悪い状態ではない

むしろ上条の原型がどんな人達なのか、滅茶苦茶気になっている、という所存である

あれだよ、きつとスーパーミラクルなお父さんで、超ビューティ

ーお母さんだよ

やばい、俺本人でも何言ってるか分からない

うあー眠い、それにしても滅茶苦茶眠い

夏休みは不良に追いかけて御坂と特訓して、不良に追いかけて、魔術師と戦って、不良に追いかけて、学園都市最強と戦って・・・

あれ？こんな夏休み送ってる高校生って、俺と上条だけじゃねえの？
てか俺上条とつるんでたらこんなことになってたんだよな、不良のことについては自己責任だけど

そう考えたら、不幸か分からんなー、俺がやったことは少なからず

プラスになることは間違いないんだけど

それにしても眠い、さっきと同じ事言うくらい眠い

俺がうとうとして早くも布団に潜り込もうとしている時

コンコン、とドアをノックする音が聞こえた

「夏野？」

上条か・・・

何だ、美少女が起こしにきてくれるとかそういう嬉しいイベントはないのか

ここだったらあるわけないけど

美少女つつつてもインデックスくらいだし（俺からしたらそういう対象には入ってない）

「どしたー、まさか俺が恋しくて寝込みを襲おうとしたのか？だとしたらお前を今すぐここでぶち殺すことになるが構わんよな？構わんか、よし、今開けるから死ぬ覚悟しとけや」

俺が冗談混じりで言葉を発しながら鍵を開けると

「・・・夏野だ！！」

「どうしたよそんな幽霊を見るような目をして」

俺が鍵を開け、ドアを開くと、そこには目を見開いて少し目が潤んでいる上条がいた

一言、きもい

「今下に下りたら俺がどうしてこんな状態になったか嫌というほど分かる！！」

「・・・めんどくさっ」

言いながらも、俺は上条の後ろをついていく

・・・そんで、下りただけど

「上条、悪かった」

謝っておく、悪かったな、きもいとか言っ

そりや上条もああなるわ、仕方ない、むしろああならない方が異常といえる

だっ

御坂がここにいて、その御坂は上条のことをおにいちゃんなどと呼んでいて、魔術師ステイル「マグヌスは海の親父と化していて、海パンの上からエプロンをつけ、日に焼けた御坂妹がいて、上条の母はインデックスとなっていて、青髪ピアスが修道服を身に纏っていて、きもくて、唯一違和感がないといえ、上条の父親である上条刀夜だけであろう

え？一体何がどうなってるの？

俺の夏休みに新たな項目が追加されるのであった

凄く、驚きました

目の前の現実が訳分からなくても時間は止まってくれず、勝手に進んでいく

混乱する俺と上条を置いてさっさと遊ぶという予定を立ててしまい、俺と上条は海パンはいてこいといわれ、なんだかよくわからないうちに、砂浜に立てたパラソルの下、レジャーシートの上で俺と上条は仲良く並んで体育座りをしている

さて、さっきテレビ見たんだけど、とにかく世界中がこんな感じになってるっばかった

人と人との入れ替わり・・・

俺と上条が一緒の状態ということは、これは幻覚ではない

そもそもインデックスが青髪ピアスという気色の悪い幻覚を見るはずがない

あー・・・くそ、一体どうなってやがる？

俺か？俺達がおかしいのか？そうなのか？

うああああ！！！！！！わっかんねー！！！！

俺はレジャーシートの上で海パンのまま暴れまくる
すると、上条の父上条刀夜が

「場所取りご苦労さん、といっても他に客がないから労力ゼロか」
後ろから声が聞こえて、俺と上条は後ろを振り向く

その瞬間、凍りついた

「ほう、何だ当麻、父さんの水着が気になるのか」

うつせクソボケ、いくら上条の親父だからって言っていていいことと悪いことがあんだよ

お前の息子は立派だよ、もちろん、変な意味じゃないけど

そうだ、俺達が凍りついた理由はだな

上条の親父の隣にいる、上条の母が立っているべき場所にいる、インデックスという少女にあった

インデックスはその幼児体型には似合わない黒いビキニを着ていた普通ビキニと呼ばれるものは紐と布でできているものだ、だがインデックスが着ているものは紐の部分が透明なビニールでできていて、遠目で見ると隠すべき場所を布で両面テープで貼り付けているように見えるのである

一言

滅茶苦茶うれし、

「うああああああああああ！！！！！！！！！！？」

絶叫、やばい、まずいぞ、俺はロリコンじゃないロリコンじゃない
ロリコンじゃない

よし

そうだ、喜んでる場合じゃないぞ、いや、喜んでない、決して喜んでいませんぞ？

「あらあら、あなた達的には、この格好は納得いかないのかしら・・

•
L

「それ以前の問題だろ！！お前その水着どうしたんだ、昨日は違うの着てたじゃねーか！！」

「あらあら、二、三異なる水着を用意してきただけなのだけど」

「あつはっは、うん、母さんもまだまだいけるじゃないか、水着と
いうのはこれで結構値が張るからな、父さんもプレゼントした甲斐
があつたというものだ」

その時、上条の目がギラリ、と鋭く光った

あーめんどくさいことになるなー

俺はそこから早々と退散することにした
なにやら上条達がぎゃーぎゃーと騒いでるのを、終始じーつと眺めていたのだが

「とうま、とうま、遅れてごめんね、待っててくれたんだ」

ゾクウ！っと明確に俺の背筋が震え上がるのを確認した
やばい、恐るべし、恐るべし男の猫なで声

俺は上条から視線を外す、その先に、地獄が待っていようと

そして、俺の視線の先には・・・

白いワンピースの水着の悪魔が・・・

「おい、ちょ、上条！！」

上条は我を失ったかのようにスコップで砂を垂直に掘っていく
何する気だよ！？戻って来い上条！！

もの凄い速さで砂を掘って、その深い穴の中に

白いワンピースの水着の悪魔（青髪ピアス）が首だけ外に出して、
埋められた

気絶したのだろうか、ピクリとも動かない

「上条！！」

俺が上条の肩を掴んで揺らすと、上条がハッ、とした感じになり

「・・・俺が、俺がやったのか！？」

「ああそつだ、お前がやった、でも恥じる事はない、今は完璧に
青髪ピアスが悪かった」

しばしの沈黙の後、上条は頷いた

俺から視線をずらすと、その先には上条の親父が御坂やインデック
スとビーチボールで遊んでいる

・・・まあ、ね、この光景だけなら何にも問題ない気がするけど、
子供好きお父さんみたいな感じで

でもさっきの言動を聞く限り俺達には上条刀夜ロリコンにしか見えない

上条はスコップを持ったままゆっくりと上条刀夜ロリコンを抹殺すべく、近
づいていく

「お、落ち着け上条！！まだ大丈夫、まだ大丈夫だ！！間に合う！
！」

俺は上条を必死で止める、なんだって父親ロリコンを殺さなければならんのだ！！

上条の立場が俺なら能力使って殺してるけど！！

俺が上条を必死になって止めていると

「うにゃーっ！カミやんに夏野、やっと見つけたんだぜーい！！」
という奇妙な猫ボイスが聞こえてきた

うん？俺としては滅茶苦茶聞き覚えのある声だぞ？

上条、お前は記憶喪失であんまり分からないだらうけどさ

ずざーっ！と俺達の前に身長180センチはあるであろうかという大男がダツシュで接近してきた

俺が小さい男の子だったらおお泣きしながらダツシュで逃走していたらどう

「っ、土御門？」

土御門元春

上条の隣人で、俺達のクラスメイトで、妙に腕が長いのが特徴、だらりと下げた腕が膝に届くほど

高い背丈に短い金髪をツンツンに尖らせ、地肌に直接アロハシャツ＋ハーフパンツ、薄い青のサングラスをかけ、首には金の鎖がおまけつきとなると、ボクサー崩れのガラの悪い用心棒、というイメージだが、実は不良っぽくしているのは少しでも女の子にモテたいというだけで、メイド服標準装備の義理の妹、土御門舞夏に対して甘々な駄目兄貴だったりする

「ってちよつと待てよ、何でお前がここにいんだよ！？どうやって学園都市の外に出たんだ、ひよつとして舞夏も一緒なのか！」

「何気にウチの妹を呼び捨てしないでほしいんだが、そんなことを言及してる暇もナシ、カミヤん、夏野、一個確認するけど・・・お前等は俺が土御門元春に見えてるぜよ？」

ピクッ

なるほど・・・そういうことか

「見えるけど・・・なるほど」

「えっ、何、夏野？俺置いてかないで？」

「となると、いやまさかにやー・・・ま、いいか、とにかく逃げよう、ここは危ない、何が危ないってもうすぐ怒りで我を失ったねーちゃんが来襲してくる辺りが激ヤバぜよ！！」

「は？ねーちゃんが・・・来襲？おい、まさかまだなんかあんのかよ」「いいから隣人のいうことは聞くもんだぜい！」

いやなによ、前の発言は理解できたけど、ねーちんって誰？来襲って怪獣かよ

土御門は自分の青いサングラスがずれるほどジタバタと暴れて

「ええい！カミヤん、夏野！朝起きたら何か変な事が起きていてってことに気付いてるかにゃーっ！」

「ん？ああ、何か皆の様子がおかしいな、まるで外見と中身がそのままそっくり入れ替わったみたいに見えたけど、あれ？何でお前が知ってんの？」

「だから！ねーちゃんはカミヤんが魔術を使って入れ替わりを引き起こした犯人だと思ってるんだぜよ！」

「は？」

魔術・・・今魔術って言ったよな？

しかも上条が犯人って？おいおい、いつの間に上条は警備員のお世話になるようになったんだ？

などと俺が思っていると

「見つけましたよ上条当麻・・・ッー！」

なにやら、思いつきり憎しみのこもった女の声が上条に投げかけられた

うん、俺は聞いた事あるよ、平和に話し合いしただけの仲だけど

「神裂？」

「あ、ああ・・・あの時の・・・」

「夏野太陽、そっぴやフルネーム聞いてなかったな」

「神裂火織です、それはそうと上条当麻！あなたがこの入れ替わりの魔術・・・御使墮し《エンゼルフォール》を引き起こしたことは分かっています！今から3つ数えますからその間に元に戻しなさい！」

上条、気の毒

いきなり神裂がきたかと思えば殺気を振りまきながら怒鳴るし、怖いのはアホ

「な、夏野、誰？」

「なっ・・・神裂です、神裂火織、イギリス清教の必要悪の教会の魔術師、一度まみえただけとはいえ、よもやこんな短期間で顔を忘れたとは言わせませんよ」

スマン言わせてやってくれ、記憶喪失なのよこの子

・・・待てよ？土御門は神裂のことをねーちんなんて友好的な感じで呼んでたよな

本物の魔術師と仲良くしてる土御門は一体何者なんだ？

「おいおい神裂ねーちゃん、ちょっと好戦的すぎるにやーですよ？」

「何を言っているのですか土御門、私はただ目の前の問題に全力を尽しているだけです、大体私から言わせてもらえばあなたの方こそ魔術師としての自覚が足りないのではないですか」

魔術師？魔術師だって？

「おい、今何て言った？魔術師だって？」

上条の言葉に土御門はニヤツと笑って

「そーゆーこと、俺も必要悪の教会の一員ってことだぜい」

御使墮し

なんだって？今土御門はなんつった？

オーケイ、まだ状況を飲み込めていない君達にこの俺が今土御門が言った言葉を脳内再生させて聞かせてあげよう
準備はいいかい？いくぜいっせーのーで

「そーゆーこと、俺も必要悪の教会の一員ってことだぜい」

・・・まじで？

学園都市っていう科学だらけの世界の中に魔術が？
オカルト

「ちょ、まてよ、何だそりゃ？お前が、魔術師？」

「おうよ」

土御門は素直に頷いた、その姿はもう清々しいものすら感じた

がくえんとし

オカルト

「超能力開発機関に魔術師はいないと思ってたか？むしろ逆だろ、
サイエンス マジカル

学園都市ってのは教会世界の敵だぜい、だったら敵地に潜り込んで
る工作人員の1人や2人いてもおかしくないだろうに、俺の他にも何
人か混ざってそうだし」

「・・・けど」

ふむ、確かに土御門の言ってることは一理ある

でも今まで馬鹿みたいに一緒に騒いでた奴にいきなり「僕、実は魔
ジシヤン術師なんです」って言われても実感が沸かない

つかもうちよつと早く気付くべきだったんだけど

「ま、土御門が外にいるって時点でおかしいんだけど」

「そういうことだぜい、夏野は理解が早くて助かる。実は土御門さ
んはつい13時間前まで神裂ねーちゃんと一緒にイギリスのウィンザ
ー城にいたんだぜい。もちろん申請書も血液中の極小機械もナシ、
裏技仕様の抜け道使ってにゃん」

ふむ、羨まし

ゴホン

土御門が魔術師ってことはびっくりだな、軽い言葉じゃ表せないく

らいに

だつてさ、想像してみるよ？

いきなり仲の良かった友達から「俺魔術師なんだ」って言われてみるは？何コイツ、頭おかしいの？ってなるだろ？

俺なら間違いなくカエル顔の医者^{リアル}のところに送り込むね

でも土御門の場合は極めて現実

学園都市の外にいるし、なにより必要悪の教会って言葉が出てきた時点で決定だ

疑うところがない、その一言だけで完璧に魔術師だと決め付けてしまふ

まあ魔術師なんだろうけど

てか

「お前学園都市で時間割^{カリキュラム}を受けてんじゃねえか、確か超能力者には魔術を使えないはずだろ？」

「そうだぜい、敵地に潜り込むためとはいえ、おかげで陰陽博士として最上位の土御門さんも今じゃ魔術は打ち止めさ、おまけにハンパにつけた能力^{チカラ}はレベル0にゃー。もう散々、だが世の中にや人の信頼を得るために50年も潜ってるスパイがいるくらいだぜい、このくらいでビビッてるんじゃ世の中知らなすぎだぜい？」

大変だな、土御門も

何で俺こんな偉そうなの？やだ死にたい

魔術師^{つー}のは学園都市の人間やめてる学生よりもいいモンだと思つてたけど

よくよく考えてみたら常に死と隣り合わせなんだよな

となると、俺どんだけ気楽なんだよ

「ま、つまりこつちの顔が土御門さんのリアルってことぜよ、学園都市の動向をイギリス清教に逐一伝える盗聴器、簡単に言えばスパイってことですよ」

スパイ、ねえ

俺達が馬鹿みたいにへらへらしてるところで、土御門はそんなこと

してたのか

あまりにも現実離れしすぎてる

俺は俺で不良に追いかけられたり、学園都市最強と戦ったりしてんだけど

あと魔術師とも戦ったっけ

それでも土御門の方が余程現実離れをしている

いつ死ぬかも分からないんだから

・・・いや、今はそんなことじゃなくて

「んなことより入れ替わりだよ入れ替わり、土御門なんか知ってるみたいだったけど」

「いやあ、そこそこですたい、分かってんのは入れ替わりが本題じゃないってこと、この入れ替わりは単なる副作用ってことぐらいかにゃー」

・・・それだと

「つつーことは、これは誰かが引き起こした魔術で、その魔術のことを御使堕しって言うてるってことか？だったら余計上条が疑われる理由が分かんねえ、上条には幻想殺しがあるし、魔術が使える使えない以前の問題で、超能力さえ使えないしな」

ここで、一つの問題点がでてきた

頭痛い、ちよつとなんか朝起きたときから思ってたけど頭痛い

俺が頭を抱えてその場に蹲ると

「何か苦しがつてるとこ悪いが説明させてもらうぜい」

容赦なしである、この男

ここらへんはもの凄くめんどくさいし、意味が分からなかったので省略させてもらう

そもそも説明できるほどの説明力は生憎持ち合わせてない

・・・あれ？説明が終わった途端に俺に視線が注がれてんだけど何？

あーそういうこと、分かった

「そっぴやなんで俺入れ替わりが起きてないんだろっな？」

「問題はそこだぜい、カミヤんは幻想殺しで御使堕しの効果を打ち

消せるが、天野はそんな能力を持ってない、それどころか能力の使
いようによつては傷口もふさげる、これはどういうことかにゃー？」

「それについては私本人から説明させていただきましょう」

これについては覚えがある、うん、頭の痛みはこういうことだった
んだな

「俺はちよつと不思議で自分に有害なものは自動的に分解しちまう
んだ、その分解の領域つーのは分からんが、一方通行の反射膜を
やわらげて、一方通行を殴れるくらいには、もちろんそれは無意識
のうちに行われてて脳にも負担がかかる、実際今すげえ頭痛いし、
倒れそう、だから俺はそういうことじゃねーの？そもそも俺魔術に
関しては全然だし、インデックスともあんま会ってないし」

「困りましたね、それでは八方塞です」

「でも犯人が上条の近くにいて可能性は高いんだろ？いや、俺
じゃないけど、断じて俺じゃないけど」

俺は手を振って、首を横に振りながら疑惑を振り払う

「そうだにゃー、カミヤんたちに働いてもらうってのはどうだろう？

「何を言っているのですか馬鹿馬鹿しい、あなたは大工が足りな
かったら客に家を建てさせるのですか」

「えーでもウチらがカミヤんを犯人から護って、カミヤんたちには
御使堕しの儀式場の破壊に付き合ってもらう、ギブアンドテイクの
ステキ取引だと思うんだがにゃー、そこらへんどうなのよ？」

あれ、それって俺にメリットある？ないよね、こればかりは断言
できる

メリットはない

とある少年の戦場突撃（戦場という名の風呂場）

そんなこんなで、どたばたした夏休み、いやどたばたしてない日なんてあっただろうか？

まあヘンテコな入れ替わりが起きた日の夜は訪れたわけだ
現在時刻午後8時

海の家の一階、俺達は丸いテーブルを囲んでいた

土御門は周りから見ると「女優に手を出した超美形アイドル」に見えるのでここにはいない

神裂は上条の友人としてごく普通にここにいるのだが

尤も、神裂はステイルと入れ替わっているので周りから見ると、「むさ苦しい赤髪外国人のヤロウの友達」に見えるらしいが
でも御使堕し（エンゼルフォール）って滅茶苦茶迷惑だな

インデックスが上条の母親になったり、御坂は上条の妹、ステイルは海のおヤジ、御坂妹は問題アリの格好で海の家を徘徊中、上条の父親はまあ問題ナシ

ここまでではよかった、許せる、たとえ御坂が本来の姿を知るものが見たら吐き気を催す行動をしていたとしても、許せた
だがこれはどうだ

青髪ピアスが本来インデックスが着るであろう白い修道服を身に纏い、あまつさえ「インデックス」として接してくるので上条の精神が崩壊しかねない

俺もそこそこ死にかけたのだが（精神的な意味で）上条の場合、もつときついだろう

神裂はいつものような感じなので別にいいのだが、周りから見るとステイルである

それを思うとなんともやりにくい感じになってしまうのだ

土御門に関しては超美形アイドル＋乙女と目を合わせると金属バット持って追いかけ回されるオマケつきなので、一緒にいてもいられ

ない

この苦しみを理解してくれるのは、恐らく上条、神裂、土御門だけだ
特に上条、まあ危険順位でいえば

土御門＞上条Ⅱ神裂＞俺

皮肉度でいえば

神裂＞＞＞＞＞上条Ⅱ土御門＞俺

なんていったってスタイルである

おっと、しつこかったな、悪い

上条の父親（上条刀夜）と上条がフンコロガシフンコロガシ言ってるので、めんどくさくなってるな

そして神裂が海のおヤジ（スタイル）を見た瞬間びっくりしてたな、あれは面白かった

俺はあくびしながら周りを見ると、上条の母親（上条詩菜、今はインデックス）が頬に手をあて、

「あらあら、それにしても随分と日本語が達者なのね。おばさん感心しちゃったわ」

「え？」

うむ、動揺するのも無理なだろう、姿は「インデックス」なのだから
「あ、いや、はい、お氣遣いなく」

神裂とインデックスは、同じイギリス清教の人間でありながら、とある事情で絶交状態にあるのだった

だったら動揺するだろ、うん

上条は記憶喪失だから知らないんだろうけど

「あらあら、物腰も丁寧で。大柄でがっしりした人だから、おばさん最初ももっと違うイメージを抱いていたのだけど」

ぶっ！？

あ・・・あぶねえ・・・笑っちゃうとこだったぜ

そうだよな、周りから見ると「スタイル」だもん、仕方ない、我慢しろ神裂

「けど、その言葉遣いってちょっとニュアンスずれてるわよ。だっ

てそれじゃ女言葉っぽいもの、そんないいガタイしてるなら、少し
ずつでも男言葉に直していかないと、仕草もちよつとだけ女っぽい
よ?」

ブホア!!!!!!!!!!!!!!

盛大に吹いた、仕方ない、仕方ないよ

だってね?「ちよつとだけ」女っぽいって、神裂は女よ?ちよつと
だけって!!

神裂に睨まれた、許して

「こらこらやめないか2人とも、言葉なんてものは正しくニュア
スが伝わればそれでいいんだ。おそらく彼は日本人の女性に言葉を
教わったからこうなっただけだろう。見た目がどうだろうがそんな
ものは関係ない」

それを言った後、上条がなにやら話していたが、すぐに立ち上がる
と上条の襟首を掴んだ

(お疲れ様)

俺は手を振って見送った、と思ったら

直後、俺の襟首が誰かに掴まれたのであった

掴まれた手が神裂の手だと知ったのはすぐで、俺と上条はずるず
と運ばれていった

どこへいったかって?答えは店の奥さ

目的地もなく引きずられた俺達に神裂は苦情を述べ、そこでふと近
くにある曇りガラスの引き戸を発見したようだった

「言われてみれば海の家には風呂場もあるのですね、こんなことを
明言するのもどうかと思いますが、トラブル続きでロクに湯浴みも
していない状態なのです」

海の家には風呂場がある

塩水を肌から洗い落とすためのものだ

とはいっても、神裂は愉快に海できゃっきゃしていたわけでもなく、
俺は着替えただけで海には入っていない

上条は砂遊び（という名の殺人未遂）をしていたから多少は汚れているだろうが

「けど、風呂ってあのな・・・結構のんびりしてないか？御使墮し（エンゼルフォール）はどうすんだよ？ありや完成しちまったらもう戻せないんだろ」

確かに、今日はほとんど何の行動も起こしていないでも大丈夫じゃないかな？とか思ってたりする

そりゃそうだ、今まで関わってきた事件というのはだな、炎の魔術師ステイルとの戦闘、錬金術師アウレオルスとの戦闘、学園都市最強の超能力者（レベル5）^{アクセラレータ}一方通行との戦闘・・・

それに比べて今回は「皆が入れ替わったことにしようぜ！！」というお遊戯会にしか見えない

尤も、本当ならもの凄く危険な状態なのだが

「ええ、まあ・・・私情を挟んでいられない事態なのは心得ているのですが、いけませんね。あの子に笑顔を向けられることに、私はどうしても慣れることができないようです。私には、そんな資格はありません」

やめろ、空気が重いじゃねえか、俺はそういうの大ッ嫌いなものちくしょう全く、ここは上条が妙なこと言って掘り返さないことを願うばかりだ

「ふうん、で、俺達は何で風呂までひきずられてんだ？なんか今後の作戦会議とか？」

神裂は首を横に振って

「いえ、あなた達に頼みたいのは簡潔に言えば見張りです。その風呂は銭湯や温泉と同じく共用なのでしょう？」

ふむ、確かに

しつこいようだが神裂は今周りから見るとステイルに見えているのだ曇りガラス越しに神裂が風呂に入ってるシルエットが見えても男が入ってる、としか見えない

もちろん神裂はれっきとした女性、女性である

そんなことがあったら誰かが風呂場に突撃することがあるかもしれない

そう、例えば海のオヤジ（俺達から見ればステイル）とか

・・・やばい、それ滅茶苦茶楽し、

「・・・今、それは楽しそうだと考えませんでしたか？」

「滅相もない！日本刀相手に命懸けでボケるつもりは毛頭ございませぬ！！」

「そうだぞ神裂！！俺はんなこと思ってねえよ！！『俺は』！！」
いつから学園都市の時間割を受けたんだ、神裂

「おい夏野！！何俺に罪をなすりつけようとしてんだよ！！」

「なすりつけるってなんだよ！！俺は思ってたねえよ！！」

「また『俺は』ってテメエ！！」

などと馬鹿みたいなやりとりをしているうちに神裂の姿は風呂場の脱衣所へと消えていた

曇りガラス越しでもシルエツトは映る、凄いダイナマイトボデ、

「うおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「どうした夏野！？」

頭を抱えて絶叫、危ない、色んな意味で危なかった、主に死の方向への危険性とか

と、俺が馬鹿みたいな（紛れもなく寸分変わらず馬鹿）ことをやってたら

「おっすカミヤん、夏野、こんなトコでなにやってんだぜーい？」

そりゃこっちの台詞だ馬鹿

通路の方から「修羅場アイドル」こと土御門元春が正々堂々と歩いてきた

「おい、お前周りから見たら修羅場中の野郎アイドルに見えるんだろ」

「なに、バレなきゃいいんだにゃー、これ土御門さんの基本概念でね」

ばれたとしても俺は関係ない、というわけでもし見つかったら「こ

の超美形アイドルに襲われてました」と言おうか

「・・・ごめんな、2人とも」

「きつ、」

気色悪ッ！！と言おうとしたがなんとか抑える

フッフッフ、そう簡単には言わないぜ？何か真剣な雰囲気だし

「実は2人が今まで色々ピンチだったことは知ってたんだ。錬金術師の砦に向かったこととか、二万人の人形の虐殺実験とか、色々だぜい。それを知って見殺しにしてきた。だからゴメンって言ったんだにゃー」

「うおつ、なんだコイツ、俺の知ってる土御門じゃねえ、そうか！今は――なんだ！だからか！・・・ってゴメンゴメン、謝るからそんな目で見んな、死んじゃう、ただでさえ精神的にきてるのに死んじゃう、・・・とまあ冗談はこれくらいにしといて、いいんじゃないの？別に

、どうにかなったんだし」

そう言つて上条を横目で見ると上条は静かに頷いた

アクセラレータ

一方通行の時は死に掛けたけど、今は生きてるし

つてかブルーな話今すぐ終われ！！

「そんなら、いっかにゃー。んじゃ、ブルーなイベントはここまで、こつからが本題ですたい」

「本題？」

「ざざん！夏のドキドキ神裂ねーちん生着替え覗きイベント！！」

「なっ！？正気かお前！！」

「・・・見て見て、最近のケータイってカメラ機能がついてるんだぜい」

「土御門、実は俺シルエットだけでもカメラに収めてんだ」

そう言つて俺は先ほどケータイで撮った写真を土御門に見せる

フッ、いつの間に撮ったんだって？凄いだろ、俺、変態的な意味で「生憎、俺は命を捨てるほど馬鹿じゃないんでね、最低限のリスクで最大限の収穫を得るのさ」

「流石は夏野だぜい、でもあのダイナマイトボディを目の前にして、果たして我慢することができるとかにゃー？」

「我慢してみせたさ、その分俺の頭の中は妄想でいっぱいになってはちきれそうだな」

「このシルエツト、見れば見るほどやばいぜい」

なにやら変態2人が話しているが上条はそんなこと気にしない、自分が巻き込まれるであろう戦場に自ら飛び込みに行くのはどうかと思っただけ

「でもな夏野、最低限のリスクじゃないし、危険なリスクを伴うが、その分最大限の収穫を得ることができるんだぜい？例えば風の速さでねーちんの姿を撮るとか」

「それができたら苦労しねえよ」

俺がそう口走ると、通路の床板がギシツ・・・と音を立てた瞬間土御門はまるで忍者のように物陰から物陰へと移動してどこかへ消えてしまった

まあ姿見られたら不味いわな

俺と上条は足音がした方に振り返ると

「やつほいいおにーちゃん、夏野さん。こんなトコで何やってるの？」
インデックス（こと上条詩菜）御坂（こと上条妹）だった

もちろんさっきまで超美形アイドルと変態トークしてましたなんて死んでも言えない

「あれ？つてかもうメシ食い終わったのかお前ら？」

「あらあら、違いますよ当麻さん、何か料理を出すのに時間がかかるらしくて、その間にお風呂をいただくかと思っただけなんだけど」

御坂（こと上条妹）は曇りガラスの引き戸に目を向けて

「・・・おにーちゃん、誰が入ってるの？」

「え、まあ。俺達がここに居るのは見張りなんだけど」

「見張り？わけ分かんないなー。そんなの別にいらんじゃん。中に居るの、どうせおにーちゃんの友達でしょ。だったら一緒に入

「つちゃってよう」

「（おい上条、不味いぞ）」

「（どうしたんだ？）」

「（神裂は今周りから見たらステイルに見えてるんだ）」

「（・・・ああああああああ）」

「そうだよそうなんだ！何でこんなタイミングできてんだお前らと言いたいところだがそんなこと言ってる場合じゃない！！」

「ちょ、ちょーっと待った！誰も風呂に入るとは言ってない！まして友達と一緒にいなければならないなんてルールもない！別にアイツが出るの待っても——！！」

「えー、その次の次の次まで待つてたら流石に料理はできてるよ、絶対に冷めてるよ。別にいいじゃない、男同士なんだから、さっさと一緒に入っちゃってよう」

「ん・・・待てよ？」

「これは神裂さんの丸秘画像が撮れるチャンスでは！？」

「だとしたら・・・」

「遠慮なく開けられる引き戸、情け容赦なく放り込まれる上条当麻、携帯片手にワクワクしている俺^{へんたい}」

「そこに、目の前に」

「なにやらここでは語れない姿の神裂さんがいた」

「フツ、計画通り」

「神裂さんの黒靴の一閃よりも速く、明らかに人間を超えたスピードで俺は携帯のカメラのシャッターを切った
もちろん、フラッシュ機能なしで」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2192y/>

気付いたら、そこは学園都市で

2011年12月2日17時58分発行